

Lib.

京都産業大学図書館報

v.35, 増刊号 (Dec. 17, 2008)

発表！！

第4回京都産業大学図書館 書評大賞

入賞者一覧	2
選考経過と全体講評	3
入賞作品ならびに講評	
<大賞>	4—5
<優秀賞>	6—15
<佳作>	16—33

読書感想文から書評へ	
書評委員の期待すること	34—35
アンケート・統計・概要	36—40

第4回京都産業大学図書館書評大賞

第4回京都産業大学図書館書評大賞には173名179篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次の通り受賞者が決定しましたので発表します。

大 賞	
氏 名 (所 属)	書 評 対 象 図 書
ほかぞの たく 外 菌 拓 (経営学部経営学科 4年次生)	『幼年期の終わり』

優 秀 賞	
ぎのざ 宜野座 さやか (法学部法律学科 4年次生)	『卵の緒』
すぎもと みゆき 杉本 美幸 (外国語学部中国語学科 3年次生)	『しゃばけ』
なかお まこと 中尾 真 (法学部法律学科 3年次生)	『知事のセクハラ私の闘い』
ふくい ようすけ 福井 陽介 (外国語学部英米語学科 4年次生)	『格差はつくられた』
ふじい さき 藤井 咲 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『5年3組リョウタ組』

佳 作	
おかだ しんいち 岡田 真一 (経営学部ソーシャル・マネジメント学科 2年次生)	『検証!日本の食卓：私たちは何を食べているのか?』
せじま まさひろ 瀬島 正大 (理学部数理科学科 4年次生)	『日本の美意識』
とみやま しゆん 富山 峻 (経営学部経営学科 2年次生)	『砂の女』
はった ゆか 八田 佑香 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『眉山』
ふくだ たけろう 福田 丈朗 (経営学部経営学科 3年次生)	『脳の栄養失調：脳とダイエットの危険な関係』
まつなが ゆう 松永 侑 (文化学部国際文化学科 3年次生)	『盲導犬チャンピイ：日本で最初にヒトの眼になった犬』
みやじま あきよ 宮島 晃代 (文化学部国際文化学科 3年次生)	『最後の将軍』
もりしま しほ 森島 志帆 (法学部法律学科 4年次生)	『スポーツは「良い子」を育てるか』
もりもと たろう 森本 太郎 (法学部法律学科 4年次生)	『きよしこ』

※今年度、佳作は9名。氏名の50音順（各賞ごと）。

選考経過と全体講評

図書館長 小林 一彦 こばやし かずひこ

「私が勧めていることは、読書感想を友達と語り合うことである」とは、図書館報 Lib. 前号での益川敏英理学部教授の言葉です（《特別寄稿》「私の読書術」）。学生時代に、書物を熟読し、その内容についてあれこれ仲間と批評し合い議論することの楽しさは格別です。体験した者でなければわかりません。第4回を数える図書館書評大賞ですが、毎年のように作品を寄せてくれる常連さんも現れてきました。学生諸君に、書物を読み、批評するよろこびを知っている人たちが育っている証左と、主催側の代表として、感慨も一入です。

書評大賞の選考は、教員委員5名、職員委員5名、そして図書館長の計11名で構成される、図書館書評大賞選考委員会が担当します。第1回選考委員会は4月23日（水）に開催、募集要項をはじめ選考方法などが決定・確認されました。情宣活動の一環として6月18日（水）には、直木賞作家の朱川湊人氏の講演会「どうせ死ぬなら小説書こう」を図書館ホールにて開催し、一般市民の皆様を含め多数の来場者がありました。

さて、今年の本賞。9月末日の締切りまでに179篇の作品が寄せられました。選考は本人に関わる一切の情報を隠し、最後まで受付番号のみでなされます。まず、図書館の職員委員5名により、予備選考が行われました。要項に照らして文字数の制限は守られているか、図書館所蔵の作品が対象かどうか、を基準に選考対象リストが仮作成されます。仮リストは10月6日（月）の第2回選考委員会にかけられ、協議の上、要項の条件を満たしていない20篇を対象外とし、1次選考に159篇を残すことで合意がなされました。159篇を5つに分け、教員委員と職員委員の2名1組が、相談せずに各自で精読し、それぞれの採点結果を持ち寄り評価をつき合わせて、2次選考へと進む作品を精選します。その結果、55篇が選考を突破しました。次の2次選考では、1次選考の採点を白紙に戻し、11名の全委員が全55篇をあらため

て精読、日本語表記・文体・構成・読解力・展開の仕方・独自の視点・論理的整合性・的確な意見かどうか等々、細部にわたって吟味し、点数を付けました。その上で、各委員から提出された評点を合計、点数の高い順に一覧リストが作成されます。11月17日（月）の第3回選考委員会では、このリストをもとに、上位の作品が入選にふさわしいかどうか、これ以外にも優れた作品を見落していないか、また特に選考委員が推す作品があれば披露し論拠を示してもらおうなど、慎重な討議が繰り返されました。その結果、大賞以下の各受賞作が内定に至ったのです。このような厳しい選考をくぐり抜け、見事、受賞の荣誉に輝いた諸君に、心よりおめでとうを申し上げます。

ところで、毎年のように選考委員のあいだで話題にのぼるのは、書評という能動的な行為はやはり容易ではない、難しい、ということです。応募作品の中には、書評の域に達していないものや、そもそも何が言いたいのか読み取れないものもありました。書評という行為の根底には、書物の価値を客観的に評価してやろうという強い意思と批判精神が不可欠です。受賞者の諸君も、現在の自分に満足せず、さらに高みを目指して、もう一段の精進を期待したいところです。

なお、既発表の書評からの明らかな盗用・剽窃と見られる応募作が何点かあったのは、きわめて残念なことでした。絶対に許されない行為で、心あたりの者には、猛省を促したいと思います。

ご多用中にもかかわらず、小田先生（経済）・深尾先生（法）・柴田先生（外国語）・佐藤先生（工）藤井先生（コンピュータ理工）、そして天笠・池田恵・近江・中上・真部の皆さんは、それぞれ長期間にわたり選考に従事してくださいました。また末筆になりましたが、協賛いただいた丸善株式会社・株式会社紀伊國屋書店・株式会社キャリアパワー・雄松堂京都株式会社の各位にも、深甚の謝意を申し上げる次第です。



大賞

ほ か ぞ の た く
外 菌 拓



書名：『幼年期の終わり』

著者：アーサー・C・クラーク
池田真紀子 訳

出版社・出版年：光文社，2007

「『幼年期の終わり』を読んで」

本書『幼年期の終わり』は、ロシア系宇宙飛行士のヘレナ・リャホフが、祖国の科学者で宇宙開発の父に「コンスタンティン・ツィオルコフスキーが百年前に思い描いた宇宙新時代がいままさに開かれようとしているのよ」と思いを馳せる場面から始まる。ここで彼女が敬意を寄せた宇宙開発の大先輩、ツィオルコフスキーは次の言葉を残している。曰く「地球は人類にとってゆりかごである。だが、ゆりかごで一생을過ごす者はいない」と。この言葉こそ、本書でクラークが描く人類の種族としての若さや、進取の精神を象徴しているのではないか。

本書の著者、アーサー・C・クラークといえば、ロバート・ハインラインやアイザック・アシモフと並び称される世界的なSF作家である。もしクラークを知らなくても、スタンリー・キューブリックと共に構想を練った『2001年宇宙の旅』なら聞いたことがある人も多いだろう。このような世界的SF作家の名作である本書、『幼年期の終わり』を敢えて皆さんに紹介するには理由がある。『幼年期の終わり』は1953年初版の古典的SF作品である。全3部で構成されているが、その第1部第1章は当時の時代を反映し、東西冷戦下の米ソ対立を軸に物語が始まる。だが、ソ連が崩壊し、冷戦をモチーフにした書き始めは陳腐化し始めた。そこで、1989年にクラークはプロローグを東西冷戦から、国際共同火星探査ミッションが行われている21世紀に設定を変更する改稿を行った。この改稿により、古典的SF作品である本書に古めかしさや抵抗を感じることなく自然とSFの物語であるという認識を与えてくれる。

華々しい宇宙進出で幕を開けた本書はしかし、すぐに転換を迎えることとなる。人類は後にオーヴァーロードと呼ぶことになる異星人によって管理されることになる。ここまでなら異星人の侵略というSF作品にありがちな展開である。ところが本書の素晴らしい点は、人類を遥かに凌ぐ知性と科学を持ち合わせた宇宙人による管理は、人類にどのような影響をもたらすかという思考実験の手段でしかない、という点にある。これは言い換えれば、オーヴァーロードという神にも似た存在が人類をある一定の方向へ成長させようとする時、人類はどう反応し、従い、あるいは反抗し葛藤するのかを描くことにより、人類の可能性や問題点を浮き彫りにしようという試みである。

第1部では、各登場人物が人類という種族のそれぞれの性質の一面をもって登場する。国連事務総長ストルムグレンは人類の平和と秩序を願いながらも、オーヴァーロードの管理に対する多様な意見に苦慮し、自らもオーヴァーロードに疑問と敬愛の相反する感情の狭間で悩む。ここには人類のもつ良心や、人類と神との関係性すら垣間見える。それに対しフリーダムリーグの面々は、管理を嫌い自由を求め、時には手段を選ばず暴力的になる人類の種族としての若さや未熟さを象徴しているように思える。そして第2部では、反発しながらもオーヴァーロードの指導の下で飛躍的に文化的になり、第2部のタイトル通り

黄金期を過ごす中で、平和で文化的だが確実になにかの衰えを感じる人々が登場する。管理されるということは安心を得ることと引き換えに、自主性や異端を排除し、種族としての活気が失われていくということを感じ取る人々の語りかけは、読者に守られるということと管理されるということの意味を問いかけているように思える。この疑問に至り、それでも好奇心を抑えることが出来ず、オーヴァーロードの母星へ密航を試みる青年ジャン・ロドリクスは、探究心や好奇心に抗えないツイオルコフスキーの言葉の体現者という人類の一面を感じさせる。

しかし、私は第1部と第2部は、クラークが真に試みた思考実験の前段階に過ぎないのではないかと考える。この小説が世界的に愛読されるのは、第3章で投げかけられる問いにこそあるのではないか。それまで「人類のお守り」をしてきたオーヴァーロードの上にもまだ未知の存在があり、オーヴァーロードは種族としての進化の道を見失った種族であるのに対し、人類は未熟だが無限の進化の道が用意されている。種族として進化出来ないということは、まるでこれ以上成長することはないと宣告されたようであり、それは圧倒的な知性をもっているオーヴァーロードだからこそ、限界を否応なく理解できてしまう。オーヴァーロードの総督であるカレランがジャンに漏らした人類への嫉妬は、老いを迎えた老人が若者に抱く感情にも似ているのではないか。そして結末は、人類の辿った末路とカレランの種族としての悲哀が、読者の予想を超越して描かれている。この結末こそが、この物語に果てしない奥行きを与えているのだろう。

本書は前述の通り、国際情勢の変化を踏まえて改稿された。だが現実にはクラークが描いたプロローグのような21世紀を迎えただろうか。ご確認いただきたい。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 佐藤 賢一

大賞となった外菌さんの書評には、言うまでもなく選考委員会での審査の結果、最高点がつけられました。特筆すべきことは、総勢で11人いる委員がそれぞれにつけた最高点が、この作品とは別の作品に与えられた中で、この書評が総合成績で最高点を獲得したことです。このことは本書評が「全委員から最も高く高い評価を受けた」ことを示しています。ある書評が優れたものであるためには、様々な技術的な要件が挙げられると思います。その上で「より多くの人からの高く高い評価を受ける」ことが総合的にも重要な要件であること、外菌さんの書評はこの要件を最も高いレベルで満たしていた、ということ強調します。

『幼年期の終わり』は、サイエンスフィクションの古典的名作として知られています。そして、著者が全3部構成の第1部を初版から40年の歳月を経て大幅に改稿し、現代社会の背景をふんだんに取り入れることで、“新しい”名作として生まれ変わりました。著者がこの物語に込めた思いは、本書評で「思考実験」という表現によって、きわめて印象的かつ効果的に指摘されています。その「思考実験」の方法と、さらには結果が展開されていく物語の中で、わたしたちは著者が意図する世界へ、そしてそのことを通しての人間観、世界観、さらには宇宙観といった広がりのある思考の世界へ誘われていきます。みなさんも『幼年期の終わり』を手にとって、そのような世界へ足を運び、豊かで刺激的な思考実験に遊んでみてはいかがでしょうか？

外菌さん、第4回京都産業大学図書館書評大賞での大賞のご受賞、誠にありがとうございます。わたしは以前に、ある本屋で『幼年期の終わり』の前を、気にはなったのだけれど手に取ることもなく通り過ぎたことがあります。この書評を読み、それではと、この本を手にとって読む機会を持ちました。そして、この講評を書くにあたって、もう一度読みました。実に期待通りの面白さ。この講評の最後は個人的なお礼で締めくくらせて下さい。どうもありがとうございました。

受賞者から一言



私がこのような晴れがましい賞を頂けたのは、互いに切磋琢磨したゼミ生、そして私の視野を大きく広げてくださった川又先生なしには考えられず、感謝でいっぱいです。そして、数多くの書評の中から私の書評を評価して頂いたことをとても誇りに思います。

近年、本離れが叫ばれていますが、それは単にお気に入りの一冊に巡り合えていないだけだと私は思います。もしこの書評を通じて一人でも本書に興味をもっていただければ最高の幸せです。



宜野座さやか



書名：『卵の緒』

著者：瀬尾まいこ

出版社・出版年：新潮社，2007

「家族のかたち」

家族の意味を広辞苑で引くと「夫婦の配偶関係や親子・兄弟などの血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎にして成立する小集団。社会構成の基本単位。」とある。しかし人によって「家族」と聞いて、思い浮かべるのはそれぞれ違うだろう。

この『卵の緒』に収録された「卵の緒」と「7's blood」の二話に出てくる家族は、一般的に思い浮かべる親子や兄弟とは少し異なっている。

「卵の緒」の冒頭は主人公の育生の言葉から始まる。「僕は捨て子だ。子どもはみんなそういうことを言いたがるものらしいけど、僕の場合は本当にそうだから深刻なのだ。」そう言って育生は母の君子にへその緒を見せて欲しいとねだる。のりりくらしと君子はかわすのだが、結局見せることとなり、育生に渡されたのが箱に入った卵の殻のかけらなのだ。ここで読者はこの親子には特別な理由があることに気づくのだが、その理由は物語の終盤で語られることとなる。その理由はなんとも不思議なものであるが、日常で交わされる育生と君子の会話から君子の独特の感性がうかがえるので、君子ならそういうこともあるだろうと自然に受け入れられてしまうところにこの物語の温かさを感じることができる。

また真面目な育生の質問に君子はユーモアたっぷりに返すのだが、その言葉は物事の核心をついており、君子流の楽しく生きるヒントが散りばめられている。例えば君子が育生に学校を休むように説得するシーンがある。「たまに外れたことをしてみないと、ものの重要度がわかんないの。学校は大切だし、休んじゃいけない。でも、学校を休むことはたかが知れている。たいしたことないってことも、大切だってことも、そのことを破ってみたいとわかんないのよ。ね？」と言ってみたりする。

そして君子の言葉はいつだって真っ直ぐに育生に向けられる。どれだけ育生のことを愛しているかとしつこいほど何度も伝えている。それは血の繋がりのない親子だからこそ、目に見えない何かで繋がろうとしているようにみえる。やがてこの二人にも家族が増えていく。目に見えない形のないもので繋がっているからこそ壊れることなく、日常の家族としての営みが続いていく。

「卵の緒」と正反対なテーマなのが、「7's blood」である。物語は高校生の七子が家庭の事情で母の違う弟の七生と二人で暮らすことになる。最初は七生に対して不信感を持つ七子であるが、共に暮らしていくうちに徐々に心を通わせていく。

心を通わせるきっかけが、七子が腐ったケーキを食べたことだ。七生の計算した態度に

不満を持つ七子は七生とケンカをし、七生は七子のために用意したバースデーケーキを渡せず腐らせてしまう。それを見つけた七子が、まるで七生の心の中の汚い部分も受け入れるようにケーキをほおぼるのだ。この時七子が七生を取り巻く環境をも包み込み受け入れ、そのことを通して七生は素直に振る舞うことができるようになり、二人は初めて姉弟となる。

物語の中盤で、七子は血の繋がりのある者が七生だけになってしまう。やがて七子はなぜ七生と暮らすことになったのかの意味を知るのだ。そこには母の温かい気遣いが感じられる。たとえ遠く離れて会わなくても自分と血の繋がった者がいる、ただそれだけでどんなに心強いのか、母はそれを知っていたのである。その繋がりを母は七子のために残してくれたのだ。血の繋がりとはい決して切れることはない。だからこそ人は一人でも前へ進んでいけると七子は気づく。

「血が繋がらなくても、一緒にいれば家族になれる」と「血が繋がっていても、離れていても家族」この相反するテーマを2つの物語が見事に表している。2つで1つの物語が完成する。人それぞれ「家族」の意味が違うように、家族の形もまたそれぞれ違うのだ。欠けていたりして、いびつな形でもそれが自分の家族だ。人は一人では生きてゆけず、誰しもが家族を持っている。そうして日々の生活を送り、人生となる。その人の営みの根幹を『卵の緒』は温かな視点で描いている。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 佐藤 賢一

家族という言葉を見聞きすると、本書評にもあるように血縁や血の繋がりとすることを連想しませんか？一般に、血縁・血の繋がりは、ある家族を“家族”足らしめる大きな要素。その一方で、血縁のない人が集うことで成り立つ家族も、多数派ではないけれども世の中には確かに存在する。この2つのことがらを『卵の緒』という作品は描いており、書評者の宜野座さんは、作品中のエピソードを大いに引用しながら、その魅力を伝えています。その文章には、作品に深い感動・共感を得て、他の人にそのことを伝えたいという気持ちがにじみ出ています。そのストレートな飾り気のないスタイルに多くの選考委員が好感を持ったようです。例えばわたし自身は、この書評を読んで、隣にいて話をしている人から本を薦められているように感じました。その一方で、書評である以上は、もっと客観的な視点を持って作品への批評が綴られているべきなのかも知れません。そのような点を指摘しているのか、比較的辛口の評価を持った委員がいたことも事実です。宜野座さんがこの受賞経験を糧にして、より豊かな読書に、そしてより効果的な書評作りに向かわれることを期待します。

最後に血の繋がりについて一言。私たちは父親とはもちろん、胎内にいる時の母親とでさえ、血が繋がってはいません。両親と血液型が違うことって、よくあることでしょうか？これは謎かけではなく、ただのシンプルな事実です。血のつながりという表現は、そういう意味である種の「たとえ」なのだ、という前提で、“家族”を考えてみてはいかがでしょうか？

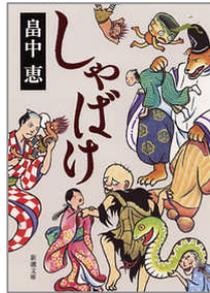
受賞者から一言



受賞させていただき、ありがとうございます。文章を書くことは苦手なのですが、大学生活の思い出になるかなと思い、応募しました。受賞を聞いて驚きましたが、とてもいい思い出になりました。



すぎもと みゆき
杉本 美幸



書名：『しゃばけ』

著者：畠中恵

出版社・出版年：新潮社，2004

「しゃばけの世界」

260万部を売り上げた時代小説である。

舞台は江戸。大店の廻船問屋兼薬種問屋、長崎屋の若だんな、一太郎を主人公に展開されるこの物語は大人気となった。日本ファンタジーノベル大賞優秀賞を受賞し、シリーズ化され、今では第七巻まで刊行されている。そのうち四冊が文庫化され、昨年にはドラマにもなった。本書はシリーズ第一巻である。

物語は、一人の大工が殺された場面から始まる。その現場を、義兄に会いに行った帰りの一太郎が目撃してしまい、当然のごとく追われることに。何とか逃げ切った一太郎、しばらくしてからまた犯人に襲われることになるが、無事捕まえることができ、事件は終わるはずだった。ところが、今度は薬種問屋が襲われ、命を落とす事件が相次ぐ。しかも、どうやらそれは先の事件と同じ犯人のようで、一太郎の出生の秘密に関するものを狙っているらしい。義兄のこと、そして、事件の対策を考えているうちに事件も進み、ついは一太郎の幼馴染、栄吉にも魔の手が迫る。己のせいで幼馴染を危険な目に合わせたと責任を感じる一太郎。逃げてばかりではいけない。守られてばかりでは駄目だ。強くならなければ。そう決心した一太郎は、全てのことに決着をつけるため、兄同然の二人の手代をお供に連れて、いざ犯人と対決する。

こう書けば、普通の推理時代小説だ。しかし、本書には他の時代小説とは一風変わった設定があり、それが本シリーズの特徴でもある。

この話の中には、いたるところに妖怪が出てくる。妖怪推理時代小説なのだ。

まず、主人公の一太郎。彼自身は人だが、祖母が妖怪だ。人と妖怪のクォーターである彼は、当然のように妖怪が見えるし、触れるし、話もできる。そして、一太郎の兄的存在の二人の手代。彼らも妖怪で、病弱な一太郎を守るためにやってきた。他にも家を揺らす鳴家、屏風や鈴の付喪神、かわうそなど、登場人物を上回る数の妖怪たちが、本書の中を走り回る。そんな彼らが出てくる事件が、一筋縄でいくはずがない。

本作品の魅力は何と言ってもキャラクターにある。主人公の一太郎は、気弱のようだが頑固であり、何かと気がついて誰にでも優しく、頭が切れる。おまけになかなかの美青年で大店の跡取り息子と、完璧なように見えるが、ただ一つ、体には恵まれない。病弱で、布団から離れる日は少なく、一年に何回も死にかけているという。彼だけではない。二人の手代もまた、魅力的な人物である。

森羅万象に通じる妖怪、白沢こと仁吉は、眉目秀麗、文句なしの美男子で、江戸の女性の人気を集めている。また、弘法大師の絵から生まれた妖怪、犬神こと佐助は、長身で体格のよい力自慢の兄貴分。何時如何なる時でも一太郎を守り、「若だんなより大事なものはない」と豪語する二人が、実にいい掛け合いを演じてくれる。妖怪なので、人とは少しずれているが、そんなところも含めて高い人気を得ている。

他にも個性溢れるキャラクターがたくさんいるが、そんな彼らのイメージに一役買って

いるのが柴田ゆう氏のイラストだ。まあ、かわいい。文庫には挿絵がないのが常だが、本書には章ごとに小さな挿絵が描かれている。柴田氏のイラストはやわらかく、鬼の顔の鳴家を見ても、思わず顔がほころぶ。文と絵、二つの可愛さを掛け合わせた、いいコンビだと私は思う。

もう一つの魅力は文章にある。時代小説とは思えないほど砕けた文。会話が多く、読みやすいシテンポもよい。時代小説初心者の私でもすんなりと入ることができた。「強くなる……」そう最後に呟く一太郎を見て、頑張ったね、と拍手を送りたい気持ちにさせる。誰にでもわかる文章で、人を感動させられる、理想的な作家である。

ただ、残念なこともある。所々に出てくる時代小説の専門用語だ。他が優しい文だけに、どうしても浮き彫りになる。読み飛ばせないほどではないが、どこか引っ掛かる。欲を言えば、簡単な解説が欲しかった。また、犯人が犯人なだけにトリックも何もなく、推理ものとしては物足りない。叙述トリックめいた箇所もあるが、読む人が読めば一発で看破されるだろう。どうにもわかりやすい。

とはいえ、小説としては一級品だ。わかりやすい文章、魅力的な登場人物、一風変わった、奥深い内容。これで売れないわけがない。時代小説だから、と尻込みする必要はない。それは自信を持って言える。特に、少し疲れた、という人にはうってつけの本だ。

この本には、人が、妖怪が生きている。

よく晴れた日の離れ。切れ長の目をした美男子が菓子鉢に菓子を盛り、少し強面の男が茶を淹れてくれる。縁側では、一足お先に優しい顔をした若だんなが菓子を頬張っている。そして、そんな彼らの周りにはありとあらゆる妖怪が菓子を貰おうと騒ぎ、集まってくる。

本書を開けば、こんな癒しがあなたを待っている。妖怪たちに癒されるのも、悪くないものだ。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 深尾 正樹

よい書評といえるためには、対象図書の内容を十分に理解したうえでそれを正確にかつわかりやすく紹介し、的確な批評を加えること、そしてそのことによって読者にその図書を手に取って読んでみたいと思わせることが必要であろう。

さて、本書評であるが、まず対象図書の内容を紹介する際に、単純な要約というかたちを採らずに、ポイントとなる点をいくつか指摘してそれぞれに付き簡潔に説明するという方式を採用している。この方式は対象図書が小説であるために採用可能であったかもしれないが、初めの方ですでに全体についてのごく簡単な要約がなされており、それがあることによって採り得た手法であるともいえそうである。その意味で、本書評は構成面での工夫が優れていたともいうことができよう。

他方、対象図書について批判的な指摘もなされている点に触れておきたい。商業ベースで行われている書評はともすれば本を売するためにそのセールスポイントのみを示す傾向にあり、そのことが書評大賞に応募された書評にも強い影響を与えている。冒頭で示した、よい書評としての要素である「手に取って読んでみたいと思わせること」とは微妙な関係に立つかもしれないが、対象図書への批判的評価は必要であり、本書評ではそれがなされている点でも評価したい。

なお、本書評の筆者は小泉八雲著・池田雅之編訳『妖怪・妖精譚』の書評も今回の書評大賞に応募しており、こちらについても優秀賞の対象となる評価を得ていたことを付言しておきたい。

受賞者から一言



この度は優秀賞という名誉ある賞に選んで頂き、ありがとうございます！昨年は佳作だったので、上を目指すという目標を果たせ、大変嬉しく思います。

この調子で来年は一位を狙っていきますのでよろしくお願いします。



優秀賞

 な か お まこと
 中尾 真


書名：『知事のセクハラ私の闘い』

著者：田中萌子

出版社・出版年：角川書店，2001

「素直で強い気持ちを持つ大切さ」

本書は、平成11年に、知人の紹介で選挙のアルバイトを頼まれ、選挙の手伝いを始めるがまもなく知事からセクハラ被害を受けて、事件発生から大きな権力を持つ知事を相手に告訴し、精神的に苦痛な思いをしながら裁判を経て判決までを書かれたものである。

ここには著者の「自分の尊厳を守るために闘う」という思いがこめられている。また本書は実際に起きた事件で、実際に被害にあった方が書かれた本であるため、実に生々しく書かれており、著者の思いがひしひしと伝わってくることは言うまでもない。

本書を読み終えて、率直に感じたことは、裁判が終わり事件に終止符が打たれても著者のトラウマとの闘いは、これから先も続くのだと考えさせられ、事件の被害者への影響は想像をはるかに超えるものがあつたのだと思わざるを得ないくらい生々しく、被害者のつらい思いが非常に胸に突き刺さるような心持ちになった。またセクハラという卑劣な行為を行った知事対当時、女子大生であつた著者の闘いだと思いながら文字を追っていたが、もっと壮絶な闘いが著者に重くのしかかっており、裁判に行き着くまでのさまざまな問題が著者を苦しめていて、考えていた以上の複雑で悲惨なものであり、著者の精神状態をあれほどまで蝕むとは思ひもよらなく、こちらまで憤りを感じられた。相手が知事ということによりメディアがこの事件を取り上げたが「選挙妨害だ」とするメディアが多く、コメンテーターのなかには、被害者ではなく知事にがんばってほしいなどという声があがっていた。さらには、マスコミからの中傷、誹謗、嫌がらせなどが殺到するといった事態になり、被害者を保護することはまるでなく、裁判に勝つ可能性が低いとされていたため親からも応援ではなく「やめときなさい」と釘を刺されてしまう。そうした絶望の中にいた著者は孤独と不安でいっぱいであつたに違いないと思う。しかしながら、そのような状況にいた著者を守ろうと弁護士が必死になり親身になって著者と一緒に関闘するといった場面も見られ、人と人の繋がり大切さや温かさを感じ取れるものだとも感じた。

この著者がなぜ絶望的な状況から闘えたのかというと、一つは著者が告訴して絶対に知事を選挙に勝たせてはいけないという強い思いを持ち続けることができたことにあると考えられる。そして、それを維持できた理由が先にも述べたように弁護団の存在なのではないかと思う。

さて、裁判にいたるまでだが、著者はさまざまな精神的苦痛を与えられることになるが、具体的には事情聴取でのことで、そこまで聞く必要は絶対はないと思われることまで聞いて

てくる検事やメディアの中傷の問題、それによる家族の絶縁、ボーイフレンドとの別れといった、人間関係をも崩壊してしまう中で、裁判で負ければ名誉毀損で逆告訴され損害賠償を払わなければならないという状況、勝ち目のない裁判でも立ち向かっていこうとするその姿、自分の信念を貫こうとする著者を応援したくなったり、さらには、プライバシーの保護などが弱いのではないかと、日本の法のあり方に疑問を持った。なぜ被害を受けた者が裁判を起こすのにここまで追い詰められなければならないのか、非常に疑問に思ったし、フラッシュバック・トラウマのつらさをそこまで感じたことが無い私でも、著者のそれによるつらさが非常に伝わってきたのだが、なぜ度重なる事情聴取により思い出したくも無い事件を細部にわたり、何回も思い出さなければならないのか、そこも非常に疑問に思われたところである。

そうしたことを読んでいて考えることができたし、これからの司法のあり方やメディアの規制などを考えさせられるものであった。また、こうした精神状況下にいた著者の強く生きていく姿、不安を抱きつつも自分の考えをしっかりと持ち裁判に立ち向かう、といった姿やその勇気などを本書を読んでいるあいだに何度も考えさせられるのではないだろうか。著者も本書の中で綴っているが、「どのように判断して行動するかは自分自身」とあったが、この事件だけでなくすべてのことにおいてその通りであるなど考えさせられたし、本書を読みながら、自分で考えて行動するといったことの大切さなども考えさせられるであろう。また今の時代、周りに流されて行動するといったことが多くなっているが、「自分の気持ちに素直になる」といったことも思い出させてくれるのではないだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 柴田 信子

このテーマは、あまりにも重たいものがある。講評者は、若い日にドストエフスキの『悪霊』の主人公が幼女を自殺に追い込んだ告白を読んだとき、それを書いた作家本人に対してさえも、嫌悪感を抱いたのである。以来、この問題は、文学のテーマであるとしても、宗教なしの解決は無理だと考えて、この問題には触れないことにしていた。

今回、この件について考えるにあたり、まず読む側の前提として、強制わいせつ罪は親告罪であって、被害者が声をあげなければ、検察側は手の出しようがないという事情から、被害者が主体的に裁判を闘う必要があることを知ってほしい。それだけに、自己責任が求められ、苦しい歩みをしなければならなかったのである。幸いにも、被告人の自白によって、急転直下有罪の判決が得られたが、彼女にも失うものが多かっただろう。しかし彼女は人間としての誇りをとりもどしたのである。「セクハラ」という言葉は、現代ではごく軽いニュアンスで用いられているが、実のところ、この犯罪は、人間性に対する重大な侵害であることを、この本を読んで再認識した。同時に、裁判という仕組みがどれほど一般市民に親しめないものであるかを知ることになった。この書評者は、自分の意見をしっかりと展開していて、講評者(私)に、この闘いの記録を読みたい気持ちにさせる説得力があったことを高く評価したい。

受賞者から一言



今回、図書館書評大賞において優秀賞をいただきありがとうございます。本当に光榮に思いますし、また信じられない気持ちでいっぱいです。さらには、自分の言葉がみなさんに伝わったのだと思うと、大変嬉しいです。今後とも、思ったことを確実に聞き手や読み手に伝えることができるような言葉の使い方や表現の仕方を磨いていこうと思います。



優秀賞

ふく い よう す け
福井 陽介



書名：『格差はつくられた：保守派が
アメリカを支配し続けるための呆れた戦略』

著者：ポール・クルーグマン

三上義一 訳

出版社・出版年：早川書房，2008

「アメリカの格差社会の原因」

「格差社会」これは近年、日本でも社会問題となっているが、アメリカの格差社会の現状は日本のそれの比ではないことを本書やその他の書物を読むことによって知った。具体的には、貧困層は食べるものも買えず、学校にも行けず、病気になっても病院に行けないというものであるが、重要なのは格差の現状ではなく、その格差社会を生み出しているシステムにある。それは、政府が社会保障を削減することにより、貧困層と富裕層の格差が拡大している、というものである。そして、そのようなシステムを通して生み出された貧困層を、企業はビジネスの対象とし、政府はイラク戦争で必要な兵士を補うために利用している。つまり、人間を富裕層と貧困層に分類し、まるで人間が家畜の肉を食べるように、富裕層が貧困層を食い物にするものであり、平等な社会とはかけ離れたものである。

このような社会システムそのもの、また、それが生み出された背景や原因について考えることで、私は格差という現象に興味をわいてきた。なぜなら、民主主義においては本来、このような社会システムができるはずがなく、民衆が政府を選ぶ以上、上記のような富裕層だけに有利な政策を実施する政府を民衆が作るはずがない、と考えられるからである。ところが現実には、アメリカでそのようなおかしい社会システムができ上がってしまったている。それはいったいなぜなのだろうか？——その疑問を解決してくれたのが、本書である。

本書においては、アメリカでこの経済格差を生み出す政策を作っているのは「保守派ムーブメント」であり、共和党であるとされている。そして、共和党が政権をとるために利用している人種差別問題こそが、この経済格差を生み出している最大の原因である、とされる。人種差別問題を利用する例としては、1980年代に大統領であったレーガンが挙げられているが、そのしくみはこうである。福祉政策の恩恵を受けるのは基本的には貧困層であり、黒人や移民が多かったが、それを維持するための財源としての税金の大半は白人が支払っていた。レーガンは、福祉削減を訴えることで、白人が持っている「自分たちの金が黒人のために使われている、自分たちは黒人と平等な社会を作るためにわざわざ金を使っている」という思いを刺激し、白人の間に深く根付いていた人種差別感情をあおり、結果的に選挙で白人票を獲得することができた。移民の票はというと、彼らのほとんどはアメリカ市民でないため、選挙権さえ持っていない。このようにして、少数の富裕層にしか恩恵がなくその他多数の貧困層には不利な政策であっても、レーガンは選挙という土俵で勝利することができたのである。

レーガン政権以後、保守派ムーブメントは躍進し、労働組合に対し反感を持っていた企

業の経営者たちと協力関係を作ることにより、ごく一部の富裕層がさらに裕福になり貧困層はさらに厳しい生活が強いられる政策を次々と実施し、自由と平等の国であるはずのアメリカにおいて、人間が人間を飼育する、そして飼育された人間の反抗をあらゆる手段をもちいて妨害するシステムを作り上げていった。本書では、以上のように述べられている。

本書のおもしろさは、格差という問題の最大の原因を、アメリカ社会における人種差別意識にあるとしている点である。その差別意識が保守派ムーブメントという政治的派閥を生み出したのであり、それを基盤とする矛盾した政府が作り出した社会こそが、現在のアメリカなのである。本書は、この過程を政治という観点から分析することにより、アメリカの政治の変遷、そして現在のアメリカ政治の本質を理解する上で、非常に興味深い視点を提供している。

さらにこの本書は、アメリカ社会の現状を的確に捉えている。それは、最近のアメリカの世論は保守派ではなくリベラル派、進歩派が唱える社会保障政策を支持しており、保守派の力は減少しつつあるという点である。その理由としては、アメリカの有権者における白人人口の比率が減少し、選挙において人種問題が争点ではなくなってきたからだ。現に、保守派ムーブメントに支えられてきた共和党のブッシュ政権は、イラク問題で失敗し、経済でもサブプライム問題により支持を失っている。対して民主党ではオバマ候補が登場してオバマ旋風を巻き起こし、黒人初の大統領が誕生するかもしれない状況になっているのである。

本書を読むことで、テレビのニュースで流れているアメリカの経済や政治の動向をただ知るのではなく、考えるための視点を得ることができる。今回の大統領選は格差社会に対する政策も一つの重要な争点であり、格差を是正する大きなチャンスである。今年の大統領選後に誕生する政府はどのような政策を打ち出すのか、格差を生み出す現在のアメリカの社会システムは崩れるのか、私は非常に興味を持っている。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 小田 秀典

次期大統領がオバマ氏に決まりクルーグマン教授にノーベル賞が与えられる直前に、この著作を選んで書評を書いたのは、書評者には先見の明があったのかもしれない。さらに（読書しての感想なのか、読書する前からの感想なのか判然としないが）「民主主義国で、なぜ一部の層だけに有利な政策がとられるのか」という問題意識を書評者がもっていることも明らかにされていることも、問題意識をもって読書したという意味で好ましい。文章も読みやすく、クルーグマンの著作をよく纏めている。

「書評」として限界があるとすれば、反対意見についての考察をまったく欠いていることであろう。最終的にクルーグマンに賛成するとしても、批判的な視点をもって彼の主張を検討しなければならない。もちろんクルーグマンの主張は一流の経済学者としての知識と思考に基づくものなので、どんなに優秀な学部学生でも、彼の主張を読んですぐに批判をできないだろう。批判するためには対立する著作に目を通すとともに標準的な教科書を読んで、自分の視点を著作の中ではなく外において著作を論じなければならない。（他の書物を読むことで…」とあるので、既に何冊か読んでいるのだろう。字数が不足に省いたのかもしれないが、他の書物に言及しながらクルーグマンの主張を批判的に検討すれば、もっと良い評価を得たかもしれない。）クルーグマンの本をしっかり読んだことは勉強になったと思う。さらに勉強を続け、自らの思考をいっそう広げ深めることを期待する。

受賞者から一言



正直入賞すると思っていなかったのですが、素直にうれしいです。ありがとうございます。現在、この本に書かれているように、アメリカでは民主党が政権を奪いました。今後は民主党の政策に注目し、アメリカが格差を是正する国に変わるのか見守っていきたいです。



藤井 咲



書名：『5年3組リョウタ組』

著者：石田衣良

出版社・出版年：角川書店，2008

「『5年3組リョウタ組』を読んで」

今日あらゆるメディアで、教育現場での問題が取り上げられている。いじめ、自殺、親の子供に対する虐待などの問題や、また最近新たにモンスターペアレントと呼ばれる自己中心的で理不尽な要求を繰り返す保護者が存在するようにもなった。本作品はそのような現代の教育問題を投げ込んだものである。

主人公は茶髪でお気に入りのシルバーネックレスをしているようないまだときの若者、小学校教師の中道良太。そんなごく普通の教師であるリョウタ先生に次々と問題がふりかかってくる。地方の名門公立小学校を舞台にリョウタ先生が不器用ながらも健闘する姿が描かれている。また、ただ問題に立ち向かう様子が描かれているだけでなく、四季を通して先生やクラスの成長も感じることができる。章ごとにひとつの問題がリョウタ先生のもとに押し寄せてくる。それは、父親との関係に悩む少年の話や教師間でのいじめ、少年犯罪、クラス競争。これらに悩みながらも、決して逃げ出さず、前向きに取り組んでいく。最初はバカ組と呼ばれ学級崩壊しかけたクラスも、問題を解決していくうちにリョウタ先生も子供たちも成長し、クラスに一体感が生まれる。また、最初は外見から冷たい目で見っていた周りの先生たちもリョウタ先生を認めていく。

そして、話の中の様々なリョウタ先生の言葉が印象的である。第一章で父親との関係に悩みクラスを飛び出してしまった本多元也にリョウタ先生は「おとうさんと本多くん強いのはどっちだろう」と尋ねた。もちろん元也は「おとうさん」と即答した。しかしリョウタ先生は「強いのは、本多君だ」といった。2人の人がいたら、相手のことをよりたくさん感じて、わかってあげられる人のほうが、絶対に強い。強い人は弱い人の気持ちを考えてあげなくちゃいけない。弱い人は自分の気持ちを変えられないし、相手の気持ちになることもできない。だから、先に気づいたほうが、相手のことを守ってあげるのだ。と彼は伝えた。学校を守る教師が増えている中、このような風に子供を守れる先生の熱い言葉に胸が熱くなった。元也に向けた言葉だけれど、読者の私たちにも勇気を与えてくれる。

良太は、教師という職業に対して理想があるわけでもなく、この職業に就いたのはいわば成り行きで、なんとなく小学校の教師という仕事を選んだ。しかし、私は中道良太にとって先生は天職だと思う。昨日できなかったことができるようになるその瞬間の子供達の喜びや驚きの顔を観ることが教師の良さと感じられること。子供の目の高さで考え、子供の気持ちになって、子供たちの中に入って行けること。実際こんな先生は少ないだろう。

周りの教師の目を気にせず、少し強引でも自分のやり方で真っ直ぐ素直に子供達と触れ合うことで、子供たちからの信頼を得ることができる。その姿が爽やかで共感を呼ぶ。今日の教育現場にはこのような先生が必要だと思う。現実には厳しいけれど、リョウタ先生みたいな先生がひとりでも多く現れてくれれば教育現場もまた少し変わるだろう。

今までの石田衣良作品は『4 TEEN』や『うつくしい子ども』など、少年達の世界を舞台にする作品では彼らの目線で彼らの行動を主題にしてきた。しかし、この作品では大人である一人の先生目線から子どもたちの姿を描いている。その先生は、金八先生や夜回り先生の熱血教師と違い、いまどきのどこにでも居そうな普通の若者で等身大の教師の姿を描いているので親しみを感じると同時に、新鮮さも得られるのではないだろうか。

どんな人にも忘れられない先生がいるはずだ。私自身この本を読んで小学校の担任の先生を思い出した。私の先生もリョウタ先生とは見た目は違うものの児童一人ひとりに対して熱心で、子どもたちのなかに入ってこられるような先生だった。今でもその先生とは連絡を取り合い、私の人生の先生である。リョウタ先生も子どもたちにとっていつまでも忘れられない先生になるはずだ。そしてリョウタ先生はこれからも多くの子どもたちに出会い、5年3組の子どもたちのように真剣に、そして素直に向き合う教師としてますます成長していこう。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 柴田 信子

第3回の優秀賞作品石田衣良の『4 TEEN』の14才につづいて、今回は小学校5年生をめぐる教育問題についての作品が選ばれた。書評者が引用している5年生の元也少年は、クラスを飛び出してしまう児童であるが、その背後にあるエリートの父親との葛藤をリョウタ先生が少年に理解できる発想で対処し解決していく。これは現実性のある物語である。

しかし、後半部で起きた、中学生の兄と弟の真一郎の放火事件については、書評者はふれていない。自宅に放火した兄の心理とそれをかばう弟の気持ちや、リョウタ先生のはたらきかけで、クラスメートと父兄が校庭の片隅に小さな家を建てる物語である。世の中の現実としては、あまりにも楽観的で現実味が疑われる物語で、それが講評者には気にかかるところであるが、書評者の意見はない。

さらに、テストの結果による学力第一主義の現在の傾向に、石田が疑問をなげかけている点は「クラスの競争」の部分は大切な一章だと講評者は考えるが、その点についても書評者の意見を聞きたい。

著者があとがきで述べている、現代の「坊ちゃん」のような痛快な若い先生を書きたいという意図を具体化したこの作品の教師像を、講評者はよく理解している。最後に自分の出会った先生の思い出を述べているのは、身近な問題として捉えていて共感するところである。

教育現場での問題が、次々と報道される昨今の状況に関心を持っている人々に、この作品を読んでみようという気持ちを起こさせる、呼びかけの念が伝わってくるので、優れた書評である。

受賞者から一言



まさかこのような賞をいただけるとは思っていなかったのでも驚いています。自分の思いを伝えることは以前から苦手だったのですが、今回の賞で少し自信に繋がりました。自分なりの思いを伝えられてとても嬉しく思っています。これからもたくさんの方に会い、また参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。



佳作

おかだ しんいち
岡田 真一



書名：『検証!日本の食卓
：私たちは何を食べているのか?』

著者：産経新聞社会部 編

出版社・出版年：集英社，2004

(正式な書名は『日本の食卓』(出版社による))

「私たちは何を食べているのか?検証!日本の食卓」

「あなたは自分たちの子孫に、どんなものを食べさせたいですか?」と本書の最後に書かれているが、この文章は今の私たちにとっては深刻な問題であるに違いない。近年、食品にまつわる不祥事が多発している。2007年1月の消費期限切れの牛乳を使ってシュークリームを製造していた不二家、消費期限、賞味期限のごまかしをしていた北海道土産の定番『白い恋人』、伊勢名物の『赤福』。あの有名な船場吉兆では、牛肉の産地偽装、消費期限表示の偽装などがある。最近では米加工販売業者「三笠フーズ」が、残留基準値を超えるメタミドホスやアフラトキシンが検出された中国産米等の事故米を食用として不正に転売していた事件が記憶に新しい。

本書では不祥事続きの日本にメスを入れるかの如く、「食の安全性」、「食と健康」、「自給率の問題」「崩食の現場」、「食育」などの項目を調査し、それらをそのまま書いているので読んでいてとにかく気持ちが良い。

第1章ではブランド食材の事を取り上げているが、消費者がわざわざブランドものの食材を選び、高い値段を支払うのはなぜか。様々な食べ物をブランド化するために、生産者や流通に携わる人々がどういう取り組みをしているのか。これら取材をして、これまで消費者サイドに知らされていなかった、あるいは気づいていなかった問題点を浮かび上がらせた。例えば、『松坂牛』は生産管理の徹底を掲げて肥育地域を限定したが、農家がエリア内に引っ越すだけでブランドになる新制度がある。同じような環境、肥育方法で100メートル移動するだけで牛の価値が2倍、3倍にもなるのである。これは確かにおかしい話である。近年、「食」に関し、「老舗」とか「ブランド」ということを過剰にもてはやしすぎだと思う。所詮は各人の「舌」の問題である。人の舌に、「ブランドだから」という先入観を植え付け、負荷をかける風潮の行き過ぎが最近の不祥事に繋がっている事は否定できないのではないかと。今の状態が続くかぎり不祥事は無くなる事はないだろう。

日本の自給率は40%で、これは先進国と比べると圧倒的に劣る数字である。(米国、フランスは130%を越えている。ドイツは97%である。)日本の自給率は低いと言われているが、いくら数字を並べてられても理解しにくい部分がある。さらに食材も何を取り上げればいいのかわからないくらい多すぎる。そこで本書では弁当という枠でくくって考え、「幕の内弁当」を例に説明している。幕の内弁当での自給率は意外にも70%もあった、米

が100%でそれ以外に100%の食材は無かった。さつまいもと大根はそれぞれ99%、98%とほぼ全面的に自給できている。しかし、卵、鶏肉、植物油などは10%以下という結果になった。本書では「幕の内弁当・輸入食材がなければただのいも弁当」と言っているが、まさにその通りである。輸入食材がなければほとんどの家庭で寂しい料理になるのは間違いないだろう。

近年、健康ブームなどで根拠の無い情報まで流れるようになり、みのもんた症候群（みのもんたが司会を務めるテレビ番組の健康情報を見た視聴者が、番組が勧める健康法を過信して実行し、体質に合わないものを摂取するなど、医師による治療の妨げとなる行為をしてしまうこと。）という言葉まで出来てしまっている。どんな学者や研究者も認める健康食は「いろいろな種類のものを食べること」であるが、それでは大雑把すぎるということで、本書では9つの食材を毎日意識して食べて欲しいと言っている。1つ目は赤・緑・黄・茶（海藻・きのこ）の4色の野菜。2つ目は背の青い魚と赤身の肉。3つ目は豆腐・みそなどの大豆製品。4つ目は元気な卵。5つ目は乳製品。6つ目は梅干し1個。7つ目は純米酢（料理に）。8つ目はすりゴマ（料理に）。9つ目はヨーグルトである。

最初はごく普通の無知な消費者の1人でしかなかった、自分たちが食べているものについて、ほとんど何の疑問も抱いておらず、安ければ安いほどいいと思っていた私も本書を読むことによって、今一度、食のあるべき姿を考え直してみる時では無いかと考えられるようになった。便利や安いを追求した結果、何が日本で起きているのか。生きる事の絶対条件である、食の安全が、これほど脆いという現実。我々は、もっと、問題意識、危機感、そして、あえて「安い・便利」を捨てられる志、これらをもつべき時が来たのではないかと思う。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 小田 秀典

『検証!日本の食卓：私たちは何を食べているのか?』を読んでの感想が率直に述べられている。文章は、ブランド食材の実情、日本の食料自給率、具体的な健康食の薦めまで、この本が何をどのような手法に基づいて問題にしているかを良く伝えている。書評者の問題意識や危機感も伝わってくる。これらを総合して入賞という評価になったのだと思う。

「書評」として改善の余地があるのは、---今回応募のあった書評の多くに共通する問題だが---自分が読んだ本の内容と自分の感想に対する批判的記述がまったくないことだろう。食料問題については様々な情報があふれ現状についての評価も対策も分かれている。このようなときには良く基本を理解することが大事で、たとえば食料自給率についても（それを弁当として視覚化することも重要だが）それはどう定義されどのような意味を持つかを調べて考えることが批判的な読書になる。今回の入賞をきっかけに、そのような方向へと学習を進めることを期待する。

受賞者から一言



今回、京都産業大学図書館書評大賞佳作と、名誉な賞を受賞でき、とても誇りに思います。ありがとうございます。まさか自分の書評が選ばれるとは思っていませんでした。これをきっかけに、もっと図書館の利用を増やしていきたいと思っております。



佳作

瀬島 正大



書名：『日本の美意識』

著者：宮元健次

出版社・出版年：光文社，2008

「美の変遷」

燃え染まる山々に豊穡の色を見、張り詰める空と共に静寂を愛する。新緑から雪解けの息吹を感じ、燦然と降り注ぐ陽に沸き立つ。心に映すだけで打ち震える、そんな日本四季が私たちの周囲を取り巻いている。

そこに神性すら感じる程の存在と対を成し、それを「美」と捉える我々の心がある。そもそも日本人の根底に流れる美意識とは何なのか。「優美」「幽玄」、茶の湯に代表される「侘び・さび」。「美しい」「きれい」…本書は日本独特とされるこれらの美意識を一つ一つ、丁寧に見つめてゆく。

日本美の象徴といえば桜である。春を栄華し、その生を散らせ舞う様は日本人が愛す景観の最たるものだが、これは死の顕在ともいふべき光景だ。そしてそれは蕾が花びらをほどいた瞬間から始まる、旅の終着点である。

序章ではそんな桜の下で生を散らせた西行を筆頭に、芭蕉、タウトらにスポットを当てている。「旅」の最中死を向かえることに見出した「未完の美」を彼らの変遷を辿ることで読み取り、それらに端を発する自然美・「優美」を一章で深く考察しているのだ。完すること無く、悠久の変化を体現する自然美——これが優美の基層にある。先に述べた四季の姿が好例だ。日本の四季は優艶にして人心を蠱惑する雪月花に満ちている。そして玉燭し光彩陸離する花鳥風月に人は神を見る。——著者はこの精神性をこそ日本の「優美」として

いる。美は個人の基準に則して感じ取るものだという、ステレオタイプな認識しかなかったため、枠組みを拡張した、このマクロ的美に対する定義は衝撃的であった。言われてみれば必ず集団には嗜好の傾向というものが存在するはずなのである。私はこの鮮やかに彩られた自然に八百万の神々を感じる、神道に近い「優美」の概念に強く惹かれた。

本書によればこの美意識は、神仏習合によって仏教独特の生死観、輪廻の概念と一体となった未完の美・「幽玄」へと派生するようだ。加えて、不完全性を美として積極的に評価した「侘び」・侘びにより自らを限界まで責めたどり着く「さび」の境地へと展開してゆく。しかしながら「優美」の美意識は変容することなく、一貫してこれらの根底を支えているのだ。周囲の自然に内在する超越性に数多の神を感じ、崇敬する——この謙虚さともいふべき精神性が私達日本人の根底にあるのかもしれない。

四章以後は優美の終焉と近代の日本美について触れる。文明開化以後、西欧文化との邂逅の中で生まれたのが「整形された・加工された」ものへの美意識——「きれい」である。その一方で、自然を物として見る地理学の視点や西欧の「自然は征服するもの」とした宗教的自然観の拡大によって、日本人美意識の根本、「優美」は死を迎えた。

日本人の特徴に多文化主義というか、外来文化受容の（過度なまでの）寛容さがみてとれる。本書では「たえず世界性を求めようとするいわば世界主義的な習性」であり「共生を具現化する上で重視されるべき」と結論付けられているが、私はそうは思わない。周囲への対応と自身の変容を繰り返すという事は、その末路としてアイデンティティーの崩壊・喪失を常にはらむ処世術であるように感じるのだ。もちろんこれは個人にとどまらず国家単位であっても同様であろう。

近代、21世紀日本の美意識に現れたのが「かわいい」だ。今や耳にしない日は無いといってもいい程に、日本に深く浸透する形容詞である。「かわいい」は「大きいよりも小さい」、「角張ったものより丸まった」、「バランスよりアンバランスな」ものに対して用いられるようだ。これは「守ってあげたい」と感じる愛着の念らしく、成長や成熟を否定する美意識だ。思うに日本人が持つ独特の「滅びの美学」——消えかねないもの・弱々しく儂いものへの感慨、といったものが大きく関係しているのではないだろうか。もしかすると、無節操とも取れる外来文化受容の流れすらも、自身の滅びを加速させる無意識的働きなのかもしれない。

結局のところ美とは何なのか。思うに、その価値の最終決定は個人の手委ねるしかない。世には数多の美があり、「侘び」の概念にあるように、一見そうでないものもひとたび人が「美」とすればそれは一つの美意識だ。本書で説くのはそれらのごく一部であり、そしてまた「傾向」であり普遍的ではない。美意識に踊らされても、固着し過ぎててもそれは何か違うように思う。本書を読み、美とされるものに近づけば近づくほどに、人の数だけ差異を持って美意識が存在するのだと強く感じる。この不偏な「中庸」もまた、一つの美なのだろうか。答えは四季の美を選らず求める、この心の中にこそあるのかもしれない。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 深尾 正樹

対象図書のテーマが「美意識」であるからか、本書評の書き出しの部分はそれ自身が「美」を感じさせるような印象的な文章である。しかしながら、その印象とは裏腹に、読み進めていけばわかることであるが、本書評はポイントとなる点をきちんと押さえつつ対象図書の内容を要約し、それをわかりやすい文章で読者に伝えるという、非常に手堅い書評となっている。

対象図書は特別難解であるとまではいえないものの、その内容は専門的な要素を含んでおり、これをしっかり読み込んで内容を把握するのはそれほど容易なことではないはずである。しかし、本書評の筆者は内容を十分に理解したうえでこれを正確に紹介することにより、読者に対象図書への興味・関心を惹起させ、読んでみたいと思わせることに成功しているように思える。少なくとも私はこの書評によって同書を読んでみたいと思うに至ったところである。書評の審査のためではなく、今度は個人的に腰を落ち着けてじっくりと読み、「美意識」について深く考えてみたいと思う。

受賞者から一言



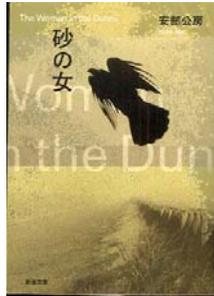
入賞3度目です。ありがとうございます。1年生の時にも出しておけばよかったです(笑)。3月卒業なので来年は出せません。理系の後輩には頑張ってほしいですね～。

書評大賞応募は僕にとってその大半が解釈と推敲の繰り返しでしたけど、単に情報源として読むだけでなく、読書後の楽しみを再発見できる良い経験だったように思います。



佳作

とみやま しゅん
富山 峻



書名：『砂の女』

著者：安部公房

出版社・出版年：新潮社，1969

「義務と自由」

物語はある男が昆虫採集のために、休暇を利用して砂に囲まれた砂丘のような土地へ来たことから始まる。その男は、昆虫の新たな種を発見することで、自分の名が後世に残されることを目標とし、独自の理論を持ち砂地へと誘われた。その砂地には小さな部落があり、部落の家は砂の穴の底にあり、毎日雪かきならぬ、砂かきをしなければ、家がつぶされてしまう状況にあった。男は、その村の長のような人物にだまされる様にしてある女の家に導かれ、その女と閉じ込められてしまい、2人の奇妙な生活が始まる。

毎日毎日、砂かきをする女。監禁状態の男。「これじゃまるで、砂掻きするためだけに生きているようなものじゃないか！」と怒り、脱出を試み、失敗する。部落のものと交渉したり、行動し脱出を謀るも失敗する。

そうしたやり取りを監視し、拘束する部落の人々。それでも決して脱出し、自由になることをあきらめることの無い男。日々をすごすうちに女との関係もおだやかになっていく。そんななかで男の脱出が成功したとき、男はどうするのか…という物語。

私がこの作品を読んで感じた一貫したテーマは「自由」、「義務」、「慣れ」だと考える。

男は毎日毎日同じように働かなくてはならない義務の日常から逃げ出すように、開放されるように昆虫採集へと走り、そして、砂の部落へとたどり着く。この砂の部落も実際に「どこである」というような表現はなく、砂丘としか書かれていない。しかし、日本の中に実際にこんな場所があってもおかしくはないのではないだろうか、と思わせるようなストーリーでもある。その表現がより、リアリティさを大きくする。

また、さまざまな角度からの思いも交差する。主人公の男からすれば、突然拉致されたも同然で砂の穴に監禁され、自由を奪われ、したくもない砂かきを強いられる。そこから「出たい」と思う気持ちも当然である。しかし、女としても男をひきとめておかなければ、自分の家が砂に食われてしまう。女とは違う理由だが男を引き止めておきたい部落の人間たち。部落の人間たちからすれば、女の家が砂で覆われてしまえばダムが決壊したように他の者たちが住んでいる穴まで被害が大きく広がりかねない。そうなってしまえば村が終わる。だから引き止めておきたい。そうした、三つ巴の状況が話へ引き込ませる。

そして、あれだけ嫌がっていた砂かきや砂の中での生活も日を追うごとに慣れ、最終的にはそれが日常になってしまう。「慣れ」である。あれだけ求め続けていた、外の世界、元の世界にもどることができるようになっていても、砂の穴の中での生活に慣れすぎてしまい、

ラストへとつながる。慣れの恐怖も描かれている。

「義務」も現実とリンクする。現実から逃げるようにして、昆虫採集という理由で砂地に来て、自由を奪われる。しかし、義務のあり方を描きながらも、その必要性についても描いている。人間は義務無しには生きられない。私たち学生の多くも勉強を喜んではいないはずだ。テスト前に辛いながらも勉強をし、テストが終わればあれをしてやろう、これをしてやろうとおもっているが、現に終わってしまうと何をしようか迷ってしまう。そんな感じだろう。

私は、作者の比喩表現もすばらしいと感じた。

「錆びたブランコをゆするような、ニワトリの声で、目をさました」

「喉がひりひり、やすりを当てたように痛んでいる」

など、目を覚ました、や喉が痛むだけでは伝わらない細かな表現を人間一度は体験したことがあるようなことに置き換え、うまく表現してある。話を読んでいく中でも実際に読んでいる側が、喉が渴き、水分が欲しくなるような描き方で、どンドンと内容に引き込まれた。その表現の多さもあり、たった半径 10 メートルほどの穴の中の狭い世界でこれほど多くのことが描けるものかと感じた。

また、主人公である男の人間くささも、見所である。実際に自分が男の状況に立たされれば、嫌でも男と同じような行動になるのではないだろうか。人間がだれしも思う、が行動に移せない、理性がとめるような、考えないようなことを極限の状態におかれ、行動に移す。また、人間が根底には持っている「ずる賢さ」。そんな人間くささが描かれている。

冒頭に書かれている

「一罰がなければ、逃げるたのしみもない」

これは一番後の、ストーリーのラストにつながる伏線にもなっている一番面白い点ではないだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 佐藤 賢一

富山さんがこの『砂の女』という作品に出会って、その内容の良さに感銘を受けている様子がうかがえます。その文章には不必要な気負いや飾り気がなく、自分らしい語り口、表現力で書評を仕上げようという意志が感じられ、好感が持てます。わたしも『砂の女』で練り広げられる、書評者も指摘していた、ある意味スケールの小さな世界での、大いなる、複雑な人間模様の描写に、小説の持つ可能性を強く感じた一人です。とても実験的な SF（サイエンスフィクション）ではないか、と思ったものでした。この書評に対する評価が、しかしながら、より高いレベルに至らなかった理由として、私見ではありますが、1 つに書評タイトルに示された「義務と自由」についての論考が、作品の中のエピソードを取り上げる内容のものに偏っており、物足りないと感じられること。加えて、最後の一文で「一番面白い点」を挙げていることが、かえって書評全体の構成上の弱点になっている。つまり、書評者が一番面白いと感じたその点こそ、書評の中心部で深く掘り下げて論考すべきではなかったか、と思われる点です。

受賞者から一言



この書評大賞に参加することで、今まででは読まなかったであろう本に出会うことができました。こうした機会ができたのでこれからも、ジャンルに好き嫌いなく時間を見て、多くの本を読んでいきたいと思えます。



佳作

八田 佑香



書名：『眉山』

著者：さだまさし

出版社・出版年：幻冬舎，2007

「眉山」

この本は、死を前にした母親とその娘との「親子の絆」をテーマにした物語であり、彼女たちを取り巻くあらゆる人々との触れ合いを通して、人間の真の優しさや、暖かさに触れることのできる、そんな作品である。

物語の舞台は、徳島県徳島市にある、とある小さな田舎町。吉野川の遥か向こうには「眉山」と呼ばれる美しい山が広がる。

あの有名な「阿波踊り」を背景にしながら、田舎独特のゆったりとした流れで物語は進んでいく。登場人物の方言がなんとも暖かくて、読み手に親近感のようなものを与えてくれる。著者のさだまさしはミュージシャンとしての印象の方が強いかもしれないが、小説家としても本当に素晴らしいと思う。彼の言葉は非常に表現豊かで、例えば徳島の自然あふれた風景や、阿波踊りの熱気や興奮、囃子の透き通るような美しい音色など、一つ一つの場面がこちらにまでリアルに伝わってきて、まるで自分もその場にいるかのように話の中にどんどんと引き込まれていく。

物語の主人公、「咲子」は東京の旅行代理店に勤める会社員。あるとき故郷の徳島でひとり暮らす母が末期がんで余命数ヶ月であると知らされる。郷里に滞在して母を最後まで看取ろうと決心した咲子は、看病の日々を通して、これまで一度も会ったことのなかった父親のことや、母が心に秘めてきた想いに気付き、少しずつ親子の絆を深めていく。主役はあくまで娘であるが、物語には母の生き様そのものが描かれている。

ちゃきちゃきの江戸っ子で、人一倍喧嘩っ早い人情もろく、周りからは「神田のお龍」と慕われ、多くの人々に愛されてきた母。余命数ヶ月という限られた命でありながらも、彼女は最後の最後まで「神田のお龍」として、強くたくましく生き抜こうとする。そんな凛とした姿は私たち読み手に生きる勇気を与え、この世に生きていく上で人間にとって一番大切なものとは何であるかを教えてくれる。また、彼女の言葉にはどれも偽りがなく、時には優しく、時には厳しく叱咤することもあるが、どれも心の底から相手の為を思っているように、一言一言が本当に胸に染みる。

「目の前では耳触りのええことばかり言うて、陰でこそそそ言うのがお前らの時代のやり方かもしれんが、お龍さんはな、相手を思えば思うだけ、はっきりと言うお人じゃ。言わなんたら、相手のためにならん、と思うから、自分はほらあ疲れるけんどな、無理無理元気出して怒る。ほれがほんまの愛情なんや」

たしかに今の世の中、自分が心の中で思っていることや感じたことを素直に伝えることのできる人間が少なくなっているように思う。相手の顔色ばかり伺い、仲の良い友人や一番身近な存在である家族にでさえどこか気を遣って、「本音の付き合い」というのが出来なくなっている気がする。このセリフを読んだとき、果たして自分もそういう人間になってしまっていないだろうか？と、思わず考えさせられた。本音でぶつからなければ相手には何も伝わらないし、始まらない。コミュニケーション自体が薄れてきている今の時代だからこそ、人と人との付き合いがいかに大切であるかをお龍さんは教えてくれる。

この物語には常に、今の時代を生きる私たちに向けられた著者の強いメッセージがこめられている。お龍さんの言葉やこの作品全体を通して、著者は、人間にとって優しさとは、愛とは、命とは何か？という答えのない問いを私たちへ今一度考えさせ、人々が忘れてしまった心を取り戻す機会を与えてくれている。

この本を読み終えたあと、何だかとても心が晴れ、清々しい気持ちになった。それと同時に、本当に色々なことを考えさせられた。人間として成長させてくれる、そんな作品に出会えて良かったと思う。私もお龍さんのように、自分に嘘をつかず、相手のことを思いやれるような強くまっすぐな人間でありたい。

皆さんも是非、愛にあふれたこの物語を手にとって、人間にとって本当に大切なものとは何なのか考えてみてはいかがでしょうか。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 柴田 信子

この作品は、映画化され、テレビでもすでに放映されたものである。さすがに、作家さだまさしは一流の作詞家でもあるので、読者は、その流れるような文に思わず引き込まれてしまう。書評者は、阿波踊りのお囃子の音色に思わず踊りたくなったかと思うような熱気のある文体で書いている。それが、選考委員の目にとまったのだろう。表現力がすばらしい点が推薦の理由である。

しかしながら、講評者の考えでは、現在のモラルからすると、不倫は許されないことである。不倫を美化することについては、同世代のものとしては納得しがたいものがある。もしかすると、これは男性の秘かな夢・無責任なことをしてもたくましい女性が強く生きて子供も育ててくれる・という風に期待しているのだろうか？主人公「お龍」の生き方は、ヒロイックでロマンチックであるが、現実には難しい。娘の気持ちの優しさに対する共感をよぶ記述はすばらしい。

受賞者から一言

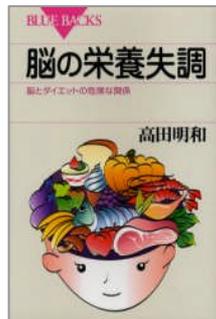


まさか自分が受賞するなんて思ってもいなかったので、とても驚いています。文章を書くのはあまり得意ではないのですが、今回の受賞を機に少し自信ができました。ありがとうございました。



佳作

福田 丈朗



書名：『脳の栄養失調
：脳とダイエットの危険な関係』

著者：高田明和

出版社・出版年：講談社，2005

「脳の栄養失調 ～脳とダイエットの危険な関係～」

ここ最近、空前の健康ブームが巻き起こっているように思う。マイクロダイエットなるダイエット食品からビリーズ・ブート・キャンプなどのDVDに至るまでありとあらゆる商品が世の中に出回っている。また、詳しくは知らないが新たにコアリズムという商品が流行っており、巷ではバナナダイエットという言葉をよく耳にする。このようなことから現在、日本では食べ物やダイエットに対する関心が異常な高まりを見せていることが伺える。しかし、これらは本当に体にとって良いことなのか。また、間違った知識を持っている日本人が多いのではないかと。そういった思いからこの本を読んでみた。

いざ読んでみると初めから驚きの連続である。痩せている人は肥満の人と同じくらい短命であるという事実。私自身ボクシングをしており体重やスタイルを気にしているが、このままでは早く死ぬのではないかと少し心配になるではないか。また、ダイエットを始めた人たちは精神不安定になりうつ病になる人が多くいるという。これは食べないことによって脳が障害をきたして起こるものである。脳は体重の2パーセントにすぎないが、摂取したエネルギーの25パーセントを消費するのである。つまり食べないと脳が働かないのである。これまた驚きだ。あんなに小さい脳がこんなにもエネルギーを消費しているなんて誰も思わないだろう。ダイエットに成功して痩せて美しくなったとしても、脳内物質のバランスが崩れていてはその喜びを感じることはできないのだ。以前、私もボクシングの試合前に減量をしていた最中、とても苦しくすべてが嫌になり、なんでこんな事をしているのだろうと病んでしまったことがあったが、今思うと脳に栄養が回らなくなりうつ病に近い症状が起こっていたのかもしれない。多くの本やテレビの特集、専門家の言葉が世の中には蔓延しているが、本書はそれらを信じて実行した場合に脳にどのような悪影響が及ぶかを中心に、体の構造や栄養素などを詳しく分析分解し書かれている。

コレステロールという言葉は1度は耳にしたことがあると思うが、どなたもコレステロールは体にとって悪いものだと思っていないだろうか。コレステロールが多くなると心臓の冠動脈にコレステロールの沈着が増し、心筋梗塞になりやすくなる。そこでできるだけ減らしたほうがいい、むしろいっそのことコレステロールを摂らないほうがいいのではないかと思う人は多いと思う。しかしコレステロールは全身の細胞の細胞膜のためには欠かせないもので、心と体の健康に必要な男性ホルモンや女性ホルモンの原料になるため、あ

る程度は摂らなくてはいけないということだ。動脈硬化や心筋梗塞の専門家などは、コレステロールが高くなれば心臓や血管にとっていかに危険か、食事制限がいかに心筋梗塞の予防に役に立つかを熱心に説明する。糖尿病などの専門家は、糖尿病がどれほど危険か、そのために失明する人も出る、血管の動脈硬化性の閉塞で足を切断する人もいと説明する。我々聞いている側は恐怖にかられ、なるべく糖분을摂らないほうが良いと思ってしまうのも無理はない。しかしこれらの専門家は、糖分やコレステロールの脳への影響については話していないのだ。つまりどういうことかと言うと、特定分野の専門家は自分の専門領域の臓器の状態改善の手段のみを強調する傾向にあり、彼らのアドバイスがトータルの健康のために良いとは限らないということである。ある臓器の異常を防ぐために他の臓器を損なっては意味がないのだ。

他にも文中では様々な実験結果や統計が人体の構造とともに紹介されており、少し太っている人やお肉が大好きな人の方が長生きする傾向にあるとか、とにかく驚くことが多く今までの常識を覆す、ためになる1冊である。この本を読んでみて思ったことは、体と脳の健康をバランスよく保つことが大切だということ。ダイエットに固執するのではなく、おいしいものを食べ、好き嫌いをせずいろいろなものを偏りなく食べて脳の健康を保つ。そうすることこそが幸せの人生を送る最大の秘訣なのだという。今まさにダイエットをしている人、これから挑戦しようとしている人、または興味がある人はぜひ1度読んでみてはいかがだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 小田 秀典

『脳の栄養失調：脳とダイエットの危険な関係』を読んで、自分のもっていたダイエットについての常識が覆される驚きが率直に述べられている。自分の興味と重なる良い本を選んだことと、それを読んで理解したことを、ハツタリや知ったかぶりをせずに、自分の言葉で自分の知識や経験と結びつけて述べている。そのため文章も平易で、書評者の驚きや心配が素直に読者に伝わる。入賞は、それが評価されたのだと思う。

「書評」として改善の余地があるのは、自分が読んだ本の内容と自分の感想に対する批判的記述がまったくないことだろう。この本を読んで自分が正しいと思っていたことは間違っていたとか自分は知らなかったとか驚いたということとは、この本が学会の常識を覆しているということだろうか？せつかくこの本を読んで自分にとって新しい知識を得たのだから、これを手がかりに、脳科学の勉強をしたり、他のダイエット関連の文献を調べたりしてみると、いっそう知識も広く確実に思考も深まると思う。

受賞者から一言



受賞の感想としては、まさか自分が選ばれるとは思っていませんでした。とか言いつつ、書き終えたときは友達同士で「今回いけるんちゃう？」とか言うてたり… (笑)。

今後の抱負としては、書評は今回限りにしたいと思っています。これからはあらゆる経営者の本を読んで、自分自身を高めていきたいです。いや、高めていきます。そして起業して成功した暁には自分で本を書いてみたいと思います。



佳作

まつなが ゆう
松永 侑

書名：『盲導犬チャンピイ』

：日本で最初にヒトの眼になった犬』

著者：桑原崇寿

出版社・出版年：新潮社，2003

「『盲導犬チャンピイ』を読んで」

現在の日本で「盲導犬」の存在を知らない人はいないであろう。「盲導犬」という存在を当たり前のもののように認識している現代では、犬を盲導犬として使用することになんら違和感はない。しかしその認識がなければ、犬を視覚障害者の目の代わりになるように訓練するなど、全く思いつかないであろう。そのような「盲導犬」は、日本でいつ誕生したのだろうか。

本書は日本で初めて盲導犬育成に立ち上がった、ひとりの男の苦悩の日々を追ったものである。舞台は第二次世界大戦後の日本。あるひとりの愛犬家、塩屋賢一氏の愛犬が自宅に入った泥棒を捕まえたことから、塩屋氏は犬の訓練の重要性を感じ、犬の訓練士になることを決意する。そして数年後、ひとりの視覚障害者との出会いから、盲導犬を育てることを決意するのである。この物語は塩屋氏が犬の訓練士を目指すところから始まり、盲導犬育成の訓練士に転向し、盲導犬が一般的に世に広まるまでが描かれている。当時の日本では「盲導犬」という存在は全く知られていなかった。単に人々からの認識がないだけでなく、盲導犬の育成方法を知る資料すらなかった。ゼロからのスタートで塩屋氏は試行錯誤を繰り返し、独自の訓練方法で日本初の盲導犬を育て上げるのだ。

本書は著者が塩屋氏から聞いた体験を、そのまま記述してある。つまり塩屋氏の感情がストレートに描かれているので、読者に「共感」を与えるのである。読み進めていくうちに、塩屋氏の感情に自分の感情が共鳴していくのがわかる。まるで自分も関係者であるかのように、塩屋氏が辛い思いをしている時は自分も苦しい気持ちになり、塩屋氏が喜びをかみしめている時には自分も嬉しくなる。これは私だけに限らず、この本を読んだ全員が感じることであろう。それほどまでに塩屋氏の感情がストレートに心に入りこんでくるほど、細かな描写がなされているのである。例えば商店街での訓練シーンだが、この店は店の外まで商品が並べられていて、次の店は上に飛び出た看板があり、その次の店の角を曲がると自転車が路上に数多く停められており……といったように、事細かに描写してあるので、まるでその商店街を知っているかのように頭の中に地図を描くことが出来る。そしてその商店街を、塩屋氏と訓練中の盲導犬がうまいこと抜けていく様子が文章で描かれていると、同時に私の頭の中でも、彼らはするする商店街を抜けていく。まるで私もその場所にいるかのように彼らの様子を想像でき、訓練に成功した時の喜びを、彼らと同じくらい感じる事が出来るのである。この小説の最も魅力的な箇所は、このように、読者も登

場人物と同じ気持ちを味わえるというところにある。

また、著者はあとがきで、「(塩屋氏の) 犬の能力を活かし、少しでも視覚障害者の役に立つことができればという熱い思いと、盲導犬の育成事業の今日までを知っていただけたら幸いである。」と述べている。本書では、初の盲導犬誕生のために奔走した、塩屋氏の並々ならぬ努力が全ページに渡って記されている。そしてその結果、アメリカにある世界最大の盲導犬育成施設と友好関係を結べるほどに成長した「財団法人アイメイト協会」が、様々な困難を乗り越え誕生した。そこまで大きな組織を作ることが出来たのは、塩屋氏が訓練の中で、「絆」を作ることに最も重きを置いていたからであろう。盲導犬を育てる上で1番大切なことは、お互いを信頼することである。互いを信頼して初めて、犬はパートナーを誘導することが出来る盲導犬となり、人間は自分の目となって働いてくれている犬のパートナーとなるのである。ここから、犬と人間が本来どう関わるべきなのかを学ぶことが出来る。近年のペットブームで、犬を飼ったはいいが途中で飽きて世話をしなくなる飼い主が増えてきている。犬は注いだ愛情を同じだけ返してくれる動物である。盲導犬に限らず、他の動物でも何でも、愛情をもって接することが基本だということを忘れてはならない。

この本はただ盲導犬が誕生するまでの軌跡を描いたものではなく、私たちに多くのことを考えさせ、そして多くを学べる、これからの人生を変えてくれるべき一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 深尾 正樹

何事においてもパイオニアとなることは極めて大変である。今でこそ盲導犬は社会に定着しつつあるが、その概念すらなかった時代の盲導犬育成の困難さは想像を絶する。

対象図書は盲導犬の育成を日本で最初に立ち上げた「日本の盲導犬の父」と呼ばれる男の体験をそのまま記述したものであるが、その内容を無難にまとめているのが本書評である。「無難に」というと平凡だと思われるかもしれないが、この「無難にまとめる」というのが実は難しい。特に対象図書のようにある人物から聞いた話をもとに構成される作品などについては、往々にしてその人物や聞き手である著者の思いに賛同するあまり、筆が走り過ぎてしまい、要約が不正確になる、記述に論理性を欠く、あるいは筆者の感情のみを延々と書き連ねる、というものになりかねない。それはもはや書評とはいえない代物である。実は本書評においてもそういった傾向が一部に見られないわけではないが、全体として見ればそれはわずかであり、内容の要約やこれに対する感想などを一つ一つ丁寧に記述していることが好評価につながったといえよう。

受賞者から一言



まさか自分が受賞するとは全く思っていなくて、受賞の知らせを聞いた時は本当に驚きました。実は普段あまり本を読まないのですが、このような機会を与えられ賞をいただくことができ、誠に嬉しく思います。また同時に、本の面白さに気付くことも出来たので、これからは少しずつでも本を読む習慣をつけたいと思います。



佳作

宮島 晃代



書名：『最後の将軍』

著者：司馬遼太郎

出版社・出版年：文芸春秋，1974

「『最後の将軍』を読んで」

時は幕末、黒船来航に揺れる動乱期。日本が政治的混乱に陥っていたそのとき、徳川慶喜は政治の表舞台に立った。徳川幕府最後の将軍となるこの男の生涯を本書は鮮明に描く。

徳川慶喜といえば、他に明治維新に関わった坂本龍馬や新撰組などに比べ、印象が薄いように感じるのは私だけではないだろう。しかし、彼は明治維新における最大のキーパーソンといえる人物である。

ここで慶喜について簡単に説明しておく。彼は徳川将軍家の生まれではなく、水戸家の生まれである。水戸は御三家のひとつであるが、他の御三家である紀州、尾張に比べて石高が少なく、官位も低いために格下に位置していた。よって、将軍継嗣権はなかった。そのような家に生まれた慶喜が将軍職に就けたのは、彼の父による彼に対する期待によるものといえる。慶喜の父・斉昭は幼い慶喜を見て、直感で「あの子は名将になる」と確信した。その息子に対する期待のうわさが世にまわったことから、慶喜は将軍継嗣権のある御三卿の一橋家へ養子に行くことになる。そして、13代将軍家定の継嗣問題に敗北し、安政の大獄で隠居謹慎を命じられるが、桜田門外の変以後、14代将軍家茂の後見職をつとめ、家茂の亡き後、将軍職に就く。

確かに慶喜は彼の父の期待通り、歴代の将軍の中で最も聡明であっただろう。常に時代の先を読み、頭の回転が非常に速いことが本書によって理解できる。将軍というと、名ばかりの存在で実際は政治を行っていなかったことも多いが、慶喜は自らで決めて政治を行っていたようである。慶喜と、倒幕を掲げる薩摩藩や長州藩などとの微妙な政治のやりとりは、手に汗握る展開となっており、読者を飽きさせない。

本書の良い点は、政治についてばかりでなく、慶喜の内面もしっかりと描かれているところにある。本書では（実際もそうであっただろうが）慶喜は、感情がどこか欠けたような、冷淡な人間である。それを物語るエピソードとして、彼の謀臣の死が挙げられる。慶喜の政策に反感を抱いた者たちが、慶喜の代わりに彼の謀臣を暗殺する。謀臣の死を知った慶喜は、涙を流すものの、「自分のために死ぬことができ本望であっただろう」と思うのである。小説の最後まで軸がぶれることのない、一貫した慶喜の人格によって、彼の思想や彼の行なった政策に納得がいく。

そして本書を読んでいると、いつの間にか、そのような冷淡な慶喜の味方になっている自分がいることに気づく。慶喜という一人の人間に引き込まれてしまう。冷淡ではあるの

だけれど、時折みせる苦悩の姿に共感する。これは、まぎれもなく筆者の文章力によるものであろう。筆者の文章は無駄がなく、そしてその中に印象的な表現が盛り込まれているのである。幕府崩壊をみな悟っていたとき、慶喜が諸大名らに雄弁をふるう場面では、「慶喜はその孤独な踊りをおどればおどるほど、そのつまさきからみるみる砂がくずれてゆくようであった。」と表現し、慶喜の辛い立場を印象づけ、読者の悲しみを誘う。他の印象的な表現は本書の冒頭文である。「人の生涯は、ときに小説に似ている。」と始まり、これから繰り広げられる物語に読者の期待が高まる。

歴史の表舞台から引きずりおろされた慶喜のその後も本書には描かれているのだが、その隠居後の生活もとても興味深い。彼はもともと多芸多才な人物であったようだが、静岡に移り住み、趣味生活に没頭するのである。大弓に鉄砲猟、油絵、カメラ、さらに刺繍。鋭い政治を行っていた人としては意外に感じる多趣味ぶりがうかがえ、楽しんで読むことができる。

彼の人生を読み終えると、なんだか爽快感を覚えた。自分の信念を一切まげない潔さ、これはなかなか真似できることではない。慶喜は自ら幕府を葬り去るという決断をした。人は生きていく上で、何らかの場面で「選択」しなければならないときは来るものである。そのときに自分の信じる道を貫きたい、そう考えさせられた。そして、歴史は勝者だけが作ったものではなく、敗者もあってこそそのものだと痛感した。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 小林 一彦

時代小説を対象とした書評は珍しい。選書眼にも好感が持てる。おかげで実に久しぶりに司馬遼太郎の作品を読んだ。優秀賞にも値するのでは、という印象を抱いて私が付けた点は、相対的に高かった。評者の日本語には乱れが無く、文章や構成もしっかりしている。要約も的確で、小説のあらすじも良く理解できる。まとめの読後感も手堅い。しかし、書評と言うより慶喜の人物評、のように感じられる。文体や表現への言及よりも慶喜論が詳細なのだ。細かい注文もある。評者が「読者を飽きさせない」とする「微妙な政治のやり取り」「手に汗握る展開」とは具体的にどのようなものなのか、もう少し読み手にわかるように書いて欲しい。それが小説の書評というものだ。この小説の魅力はどこにあるのか、何に魂を揺さぶられたのか、その点がもっとストレートに伝われば、他の選考委員のやや辛口の点数も、変わっていたことだろう。

受賞者から一言



このような賞を頂き、ありがとうございます。普段あまり読書をしない私が、まさか受賞できるとは思っていませんでした。

この受賞を機に、これからは多くの本を読み、知識を深めていきたいと思っております。



佳作

もりしま しほ
森島 志帆



書名：『スポーツは「良い子」を育てるか』

著者：永井洋一

出版社・出版年：日本放送出版協会，2004

「何のためにスポーツをするのか？」

「なぜ、スポーツをするのか？」その疑問に明確な答えを持っている人はどのくらいいるのだろうか。私は持っているどころか、スポーツをするのが大嫌いだ。本書は、少年期のスポーツはどうあるべきか、体力測定の日データや、理想と現実の比較、実状、心理的側面から分析しつつ、問題点や改善方法を述べている。その中で、私のようなスポーツが嫌いな人間が作られる過程も書かれていた。

私は昔から疑問に思っていた。「ストレス解消に体を動かすスポーツをなさい」「スポーツマンシップに則って正々堂々と」なぜスポーツばかりが神聖視されるのだろうか。運動ができる人しか活躍できず、あとは足手まといの邪魔者と思われぬ中にも余計にストレスは溜まる。何が楽しいのか、理解できなかった。

そのような状況ができるのは、スポーツに勝ち負けがあるからだ、と著者は言う。誰だってやるからには勝ちたい。そう思うのは悪くない。しかし、勝利という麻薬が、結果を重視した「勝利第一主義」を作り出してしまふ。プロならばそれでいい。しかし、少年期のスポーツにおいては、自分で考えて体を動かしていく「過程を重視すべき」である、と著者は述べている。そこにこそ、スポーツの楽しみがあるのだ、と。なるほど、私がスポーツで嫌な思いをしてきたのは「勝利第一主義」のせいだ。うまくできなくて怒られ、無視され、果てはバスケットなのに「ボールが来たら避ける」とまで言われたのは、彼らがその思いに捕らわれていたからなのか。そして、その態度を大人は諷めようとしなかった。このように、スポーツに対して嫌な思い出が多い私のような子は、スポーツが嫌いになっていく。そして、スポーツの楽しみを知ることなく、スポーツから離れていってしまうのだろう。

著者は、「スポーツはいいものだ」という漠然とした幻想を、気持ち良いまでにズバッと一刀両断する。「厳しい現実を見据えろ」と。健全な体になる？アスリートを見てください。子どもは親の満足を満たす道具ではない。少年期のスポーツだからこそ勝つてしまう現実。勝利という刹那的なものに捕らわれている子どもと、それを止めるべきはずの大人までもがそれに捕らわれている現状。それが、いじめや蔑みの感情を生んでしまう悲しい現実。

また、本書はスポーツのおかしな現実をもバツサリ切ってくれた。学校には耳が痛い話かもしれないが、意外だったのは、著者がスポーツ推薦を否定していたことだ。スポーツしかなくなってしまうこと、すなわち、狭い世界しか知らないで育つことを著者は嫌って

いる。理由は大きく二つあった。一つは、そこでしか通じない礼儀、体罰、いじめがおかしいことだと気づかないこと。理不尽なことなのに、当然にあるものだと受け入れてしまう。これは、私も見ていて不思議に思っていたことだ。ずっと文化部だった私から見ると、運動部の絶対的上下関係は理解できない。たかが1年や2年で、いばり散らす様は見ていて滑稽にすら思える。尊敬の理由もほとんどが「年上だから」と安直だ。本当に尊敬されるということは、そういうことではないだろう。もう一つは、スポーツを超えたプロ、競技の世界が如何に狭き門かということを知っているからだ。著者は、はっきり述べる。「長じてほとんどが『ただの人』になっていく」これが現実だ。つまり、スポーツで生きていくなど到底無理な話だから、他にも道を作っておくべきだ、ということだろう。

繰り返すが、本書では、使われる筋肉の種類分けや発達段階、無気力の心理やデータ等を使いながら、少年期のスポーツのあり方について論理的に述べられていた。資料の矛盾点を述べたり、暗数の可能性を示唆したりと、概ね説得力もあった。しかし、納得できないところがある。「ゲーム脳」を引き合いに出す部分だ。しばしば、少年の凶悪犯罪が起こると「ゲーム脳のせいだ」とマスコミにいいように使われている言葉で、批判の多い、不確かなものを資料として使用している。これを引き合いに出すことで、そこで述べていることは信用できないものになる。せつかく、説得力のある文だったのに、勿体無い。資料の取り入れ方には、もう少し気を使って欲しかった。

現在のスポーツに潜む問題は、本書で浮き彫りになった。しかし、私はまだ気になることがある。この著者にとって、スポーツは至上のものであることだ。スポーツだけに捕らわれるな、でも重点はスポーツへ。スポーツをすることで育まれるものを挙げるが、果たして、それらはスポーツであるからこそ育まれるものだろうか。私はそうは思わない。けれども、人はスポーツをする。スポーツに触れないことはまずない。なぜ、人はスポーツをするのか。その問いの答えは、スポーツを嫌いになる前に見つけなければならなかったのかもしれない。

選考委員による講評

選考委員代表 コンピュータ工学部教員 藤井 宏

講評者も、書評者の君と同じように、今のスポーツ界の状況にある種の違和感を抱いている。

で、違和感の第一は、(反)アマチュアリズム。講評者の世代の人は皆、近代オリンピックの創始者クーベルタン男爵の言葉“勝つことではなく参加することに意義がある”、これぞオリンピック精神だと繰り返し習ったものである。著者は、これは時代遅れのアマチュアリズムで、「余暇でたしなむ余裕のある者のみがスポーツに参加できる」という、英国特権階級のジェントルマンたちの階級意識の残滓なのだと言う。(講評者は納得したわけではありません。)

ところで著者の本論は、今の日本における特に青少年スポーツにおける勝利第一主義への批判である。詳しく紹介する余裕はないが、この点に関しては説得力のある議論が展開されている。書評者の君は、ゲーム脳という言葉を使っていることに不確かな議論であると批判しているが、講評者にはむしろ、(言葉自体の妥当性はさておき)説得力がある議論と感じていることを告白しておこう。

受賞者から一言



4年生で最後だし、せつかくなので前回選んだ本とは違うジャンルの本で、今年も応募してみました。前回とは違う観点から書評ができて楽しかったです。



佳作

森本 太郎



書名：『きよしこ』

著者：重松清

出版社・出版年：新潮社，2005

「君だけの友だち」

物語は、作家である「ぼく」の元に、吃音に悩む「君」の母親から手紙が届くところから始まる。母親は、「ぼく」が「君」と同様に吃音を抱えていることを知り、もし良ければ「君」を励ます返事をしてくれないか、と言う。けれども「ぼく」は返事を出さず、その代わりに「ぼく」と「君」によく似た、少年の「お話」をいくつか書きあげる。少年の名は「白石きよし」。「きよし、この夜」を「きよしこ、の夜」と間違え、その「きよしこ」を何でも思ったことを話せる、自分だけの友だちにしていた少年だった。

本書は、その少年に関する連作短編集であるが、現実の著者自身もまた吃音を抱えて育ったそうだ。「重松清」が本名である著者は本書を、「ぼく」に「私小説」ではなく、あくまで「個人的なお話」だと断らせた上で綴っている。作家は嘘を書くのが仕事でもあるから、その手紙が事実であるのか、さらにはプロローグの「ぼく」が著者自身のことかどうかも判らない。著者に似せただけの、まったくの空想かも知れない。だが事実か空想かはともかく、「ぼく」が「私小説ではなく、個人的なお話」だと断ったことにこそ意味があるのではないだろうか。本書は「ぼく」の私小説ではない。かつて「ぼく」に「きよしこ」という「ぼく」だけの友だちがいたように、「きよし」少年が「君」だけの友だちであるためには、「白石きよし」は「ぼく」とは独立している必要があったのではないだろうか。

さて、私が本書で最も注目したのは、「きよし」少年の心の成長と、その行動である。他の作品を見渡しても、著者が描く主人公たちは八面六臂の活躍をすることは殆どない。リストラに遭ったサラリーマンも、情熱を失った教師も、余命半年を宣告された中年男性も、いじめに遭う中学生も、誰もが辛い現実には傷つき、逃げようとし、もがき苦しむ、いたって「フツー」の人ばかりだ。そんな彼らの物語には、誰かが奇跡を起こしたり、根本的に問題が解決されたりすることはまずない。現実には殆ど何も変わらない。それでも、著者の作品群は読後に僅かでも救いを感じる。その救いとは、彼らの心の変遷だ。現実から逃げるのではなく、受け止めて、少しだけ前向きに生きようとする。それが僅かながらも確かな光となって、物語の底に温かさを感じさせる。その主人公たちの心の成長をよすがに、私を始めとして読者は救いを見ることになるのだろう。その著者のスタンスが端的に現れたのが、作中の「君を励ましたり支えたりするものは、君自身の中にしかない。」(p. 12) という一文ではないだろうか。

そうした観点から本書を眺めてみると、「きよし」少年が初めて、大勢の前で前向きに

行動し、いちばん伝えたい想いを伝えられたのは「北風びゅう太」の章だろう。お別れ会で劇をすることになり、脚本を任された少年に、担任の先生は「登場人物全員に名前をつけろ」と言う。「北風」役だった少年は、その大好きな先生に「北風びゅう太」との名前をもらって喜ぶが、同時に台詞が気に掛かる。「名前がびゅう太なら、台詞は『ひゅーっ』よりも『びゅーっ』のほうがいい。絶対に。」(p. 147) 少年には「び」を、つかえずにうまく言える自信がなかったのだった。「乗り換え案内」の章では、「ごめんね」の「ご」が言えないから別の言葉に代えた。「どんぐりのココロ」の章では、吃音をそのままに受け入れてくれる大人にも出会うが、彼にも最後に伝えたい言葉は伝えられなかった。それでも、途中の挫折はあったものの、ついに少年は負けずに「びゅううううう——っ！」と大声を上げることができた。その「び」には先生へのありったけの想いが込められていたのだろう。だからこそ余計に、私はこの章に最も心を打たれるのかも知れない。

本書で著者が伝えようとするものは、やはり、「ぼくは数編の小さなお話のなかで、たったひとつのことしか書かなかった。」(p. 284) として、本文でも述べられている通り、「それがほんとうに伝えたいことだったら……伝わるよ、きっと」(p. 284) というメッセージにほかならないだろう。「きよし」少年もまた、「きよしこ」のその言葉通りに、徐々に自分の想いを他者に伝えられるように成長していく。だが私は本書が「君」を始めとする吃音を抱えた人たちへの応援歌だとは思わない。作中での「ぼく」が言うように、励ますのでも教訓めいて叱咤するのでもなく、著者はただ淡々と「きよし」少年の日々を描写している。そこには悲しみや感動を誇張して描くといったあざとさも感じられない。そのぶん、哀しく、切なく、胸を打つ。等身大の「きよし」少年に感情移入して、彼の成長をまるで昔からの友だちの気分で見守りたくなる。そこまで考えてから初めて、本書は私にとっても、いつの間にか自分だけの友だちになっていたのだと気づいた。

選考委員による講評

選考委員代表 コンピュータ理工学部教員 藤井 宏

「北風びゅう太」では、担任の先生の言葉に吃音に悩む主人公への作者・重松清の暖かい眼がよくあらわされている。「等身大の「きよし」少年に感情移入して、彼の成長をまるで昔からの友だちの気分で見守りたくなる」と述べる”書評者の「君」は、この重松清の短編作品集を見事に紹介している。

君の書評を読みつつ、講評者は小学生だった頃の「個人的なお話」に、ふっとタイムスリップしてしまった。6年生の卒業を控えた学芸会。蜘蛛の悪者にさらわれた「いこい姫」を救いにゆく王子さま(筆者)は、チャンバラがうまくできなかつたし、音痴の筆者を劇の中で同級生の口パクで“歌わせた”のだった。

この作品は、君の世代とはちがった世代の読者にとっても、いろいろなやり方で過ぎ去った日々を想いおこさせてくれるものであるようだ。

受賞者から一言



このたびは私の拙い書評をお選び頂き、誠に有難うございます。思いがけない受賞に大変驚き、恐縮するばかりです。このような機会を与えてくださいました関係者の皆さま、著者である重松清先生をはじめ、これまで私に読書の喜びを教えてくださいました、すべての方々にお礼申し上げます。

読書感想文から書評へ：書評委員の期待すること

小田 宗兵衛

「京都産業大学図書館書評大賞」が学生諸君に期待する書評は、みなさんが高等学校卒業まで書いてきた読書感想文とどう異なるのでしょうか。読書感想文は、ある本を読んでいるときや読み終わってからの自分の心の動きを内省し、文章に纏めます。自分の心の動きは他人には確かめようのないものですから、記述は主観的です。書評は、自分の読んだ本を分析・評価します。客観的に、書評の読者を説得するように論述します。

書評も読書感想文も、読書をしての意見を書きますが、求められる意見は異なります。読書感想文の求める意見は、「この本で...ということを知って、衝撃を受けました」とか「登場人物 X の行動に感動しました」など、読んだ本に入りこんでの感想です。本の外の世界に言及されることはあまりなく、言及されても日常生活や個人的経験など自分自身の直接経験だけで、読書感想文を書くために別の文献や資料を調べることは必ずしも求められません。「京都産業大学図書館書評大賞」の求める意見は、学生が本を批判的に読んで得る評価です。著者の問題意識や方法の妥当性などを評価するために、必要な情報を主体的に集めたり日頃の勉学の成果を反映させたりすることが期待されます。¹

感想だけで終わっては、書評は読書感想文になってしまいます。もちろん書評者も、読書感想文の作者と同じように、まず本に書かれていることを手短かに説明します。けれども、それに続いて、本の内容を分析し、著者は意味のあることを正しく論じているか、自分の評価を明らかにして初めて書評になります。書評者が、読書中の心の動き---驚愕、衝撃、不安、感動、同情など---を生き活きと書くことは、書評の読者に書評者の読書を迫体験させます。ただし、書評者が心の動きを描写するのは、書評者の個人的思いを書評の読者に伝えて共感を得るためではありません。自分自身を被験者にして、著者は読者に対してどのように訴えるかを、書評の読者に明らかにするためです。書評者は、読書の感想を述べるだけでなく、なぜそのような感想をもったのかを冷静に反省します。そして、なぜその本は読者にそのような感想をもたせるのかを、読者の立場を離れて批判的に分析し評価します。²

批判的に分析するとは、書評者が常に「何を根拠にそう主張するのだろうか？」とか「そ

¹ 「青少年読書感想文全国コンクール」の応募要項<

<http://www.dokusyokansoubun.jp/index-a.html>>は、このコンクールの趣旨は「読書の感動を文章に表現することとおして、豊かな人間性や考える力を育む」ことにあると述べています。つまり、読書感想文では、客観的な分析をして誰かに有用な情報を与えるのではなく、読書によって自分自身がどのように感動して成長したかを訴えなければいけません。

² 大学図書館が学生に書評を求めるいっぽうで、学生の作品が感想文にしかなくないという問題を抱えているのは、京都産業大学だけではないようです（たとえば<<http://www.matsuyama-u.ac.jp/lib/syohyo/syohyo01.htm>>、で「松山大学図書館書評賞」の趣旨説明、入賞作品、それに対する講評を読んでください）。大学図書館は、この現状を嘆くだけでなく、どう克服するか、考えて対策を実行しなければいけません。

れだけが唯一の理解だろうか、他にも考え方はないだろうか？」という視点をもって、自分の読んだ本と読んだ自分自身を検討することです。無理矢理に本の表現や内容に難癖をつけろという意味ではありません。著者は、自身の経験や調査や考察や創作を自らの責任で書いています。安直な非難や知ったかぶりの批評をしてはいけません。部分あるいは全体を肯定するにせよ否定するにせよ、書評者は、著者に対して敬意をもって根拠のある批評をしなければいけません。それが、本の著者・読者および自分の書評の読者に対する責任です。

きちんと批判的読書をした結果として書評が全面的な賞賛あるいは同意になっても、かまいません。しっかり分析した上での肯定的評価なら、著作に対する深い理解に基づく優れた書評になるでしょう。いけないのは、対象となる本に対する批判的視点を始めから排除して読書し、書評を書くことです。京都産業大学図書館は、課題図書を指定して、この本は良い本だから、それに沿って感想・意見を書けと皆さんに強要してはおりません。皆さんに自由に図書を選択して、批判的読書の成果を発表してほしいのです。

書評大賞選考委員として私が反省することは、書評とは何かも、どのような書評を期待しているかも、学生諸君に十分に伝えていないことです。短い文章ですが、書評と読書感想文の違いについて、私の考えを上で述べました。けれども、どのような書評を求めているかは、まだ不明瞭だと思います。新聞や一般雑誌に掲載される書評は、多くは新刊書の書評で、目的は、最近どのような書物が出版されているかを広く一般読者に伝えることと、各書を読むべきか否かを決めるために役立つ情報を各読者に与えることでしょう。いっぽう学術誌の書評は、専門家が専門家のために学術書の学術的価値を論じるものです。書評大賞は、どのような書評を期待しているのか、いいかえれば応募者は読者として誰を想定して書評を書けば良いのか、明解ではありませんでした。そのため、先生に対して自分の読書を報告するようなもの、友人にこの本は良い本だと薦めるもの、自分自身のための覚書など、いろいろなものがありました。図書館は、書評大賞を続けるなら、次回までによく考えなければいけません。³

以上を読んで書評は難しいと思うかもしれませんが、怖気づかずに、もし次回があれば、ぜひ応募してください。誰でも初心者のときがあります。タイガー・ウッズも初めてクラブを握ったときがあったはずです。最初は、書こうとしたものと書けたものに距離があって当然です。高等学校までの読書感想文を書いた経験は有益ですから、活用してください。けれども同時に、大学生の書評を書こうと意識してください。それだけで、ずいぶん書くための勉強や書く文章が変わると思います。学生諸君の才能と努力に期待します。

(おだ そうべい 経済学部教員)

³ 「京都産業大学図書館書評大賞」の応募要項

<http://www.kyoto-su.ac.jp/lib/news/2008/20080526_shohyo.html>を検討しましょう。確かに「単に感想を述べるのではなく、...自分なりの分析と評価を論理的、客観的に述べてください」と、感想文ではなく書評を求めています。けれども、「本を読む喜び、共感を明確にアピールしているものを評価します」は、読書感想文を期待しているようにも理解されます。「学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受ける」ことを目指すとあるので、友人を読者に想定する書評が求められているのですが、「推薦する」という表現が、肯定的書評しか受理されないという誤解を生んだかもしれません。

第4回書評大賞アンケートから

書評の応募と同時にアンケートにご回答いただきました。ご協力ありがとうございました。これから応募しようと考えている人も参考にしてください。

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- ・ 自身の力になっているので、今年も参加したいと思ったから。
- ・ 論理的な文章表現能力を修練し、また「チャレンジする」という気持ちを大切に、それを実行したかったためです。
- ・ 本を読む(知らないことを知る)のが好きで、大学生活で様々なことに主体的にチャレンジしているという思いから応募しました。また、経済学部の名前が少ないのが気になりました。
- ・ 自分が素晴らしいと思った本をぜひ多くの人に知って欲しかったから。
- ・ ゼミの作品の中で面白い作品があったので、ぜひ他の人に紹介したいと思うようになったから。
- ・ 去年よりも上の賞を目指すことを目標に、今年も参加することにしました。自分の力をもう一度試してみたいと思ったからです。
- ・ ゼミのみんなで大賞をとろうとなり、申し込みました。

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- ①先生からの推薦・指示 (42人)
- ②図書館で見つけたから (30人)
- ③興味のある分野だから (51人)
- ④話題の本だから (6人)
- ⑤好きな作家だから (23人)
- ⑥その他 (20人) (その他の内訳)

- ・ 表紙のデザインとタイトルが良かったので思わず手にとった。
- ・ 興味ある本であることと、母親に薦められたことが選んだ理由です。
- ・ 今後の研究テーマに沿ったものを選びました。
- ・ 友人の勧め。



Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(理由)

- ・ 書評を書くことでより客観的に本をよめるから。
- ・ 在学する限り、続けようと思います。自分の力が何処まで通用するのか知りたいですし、大賞を目標に頑張りたいと思います。
- ・ 今回初めての書評で力がだせなかったもので、次回よりいい書評をかけるようになりたいからです。
- ・ 書評を書くことで頭を使い、いい意味で刺激を受けたから。
- ・ まだ読んでいない人に伝える楽しさや難しさに新鮮さを感じたため。
- ・ この様なイベントに参加することによって活字とのかかわりを増やしたいから。
- ・ やりきった感があったから。

「いいえ。」(理由)

- ・ 来年は卒業してしまうので応募できない。もし卒業生も参加できるならぜひ参加したいと思う。
- ・ まだうまく文章をまとめることができない気がするので、もう少し文章をうまくまとめられるようになってから応募したい。

Q4) 執筆してみたの感想や、提出時期、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

◆ 感想

- ・ 1つの作品について、いろんな視点から追求したことがなかったので、いい経験になりました。
- ・ 頭で思うだけでなく、文字にすることで改めて本の内容の深さを感じた。
- ・ 書評を書く意識するだけで他の本より意識的に読むことができ、効果的な学習につながった。
- ・ 普段より深く図書を読み込み、考えることが出来たので、良い機会になりました。
- ・ 書評というものを初めて書いたので、難しかった。
- ・ 感想文と書評の違いを出すのが難しかったです。また、書評を読んだ人がこの本を読んだみたいと思ってもらえるように書くよう努力しました。
- ・ 何気なく本を読むより、書評を書いてみるにより、より深く理解することができた。
- ・ 自分の感じたとおりを文字で表すのは難しい事だと改めて思い知らされた。
- ・ ただの読書感想文でもなく、本の趣旨をまとめるだけでなく、客観的に読む力と、他者にそれを判りやすく説明する力が求められるという点で、難しく感じられましたが、それだからこそ、「論理的な文章表現力の修練」になったように思われます。このような機会を設けていただきましてありがとうございました。
- ・ 多くの人が挑戦している作品だけに、他の人といかに違った内容にしようか悩みました。知名度が高い本なので、なるべく作品のイメージを壊さないようにするのが大変で、色々悩みましたが、何とか納得のいくものに仕上がりました。
- ・ 今まで書評などといったことをする機会が無かったため、苦悩しながらも有意義に評させてもらえたと思います。

◆ 対象図書について

- ・ 去年は文学作品の書評をしましたが、それとは違ってビジネス書を評するのは意外に難しいものでした。
- ・ 小説を数えるほどしか読んだことがなかったが、これからは小説にどっぷりとはまってしまうそう。
- ・ 執筆する対象図書を見つけ出すまでのほうに時間がかかったように感じました。

◆ 文字数について

- ・ 1600～2000字というのがすごくベストな字数だと思いました。
- ・ 2000字以内という制約が内容と想いを伝えるには難しかった。

Q5) 6月に「書評大賞講演会」が開催されました。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

- ・ また作家の先生を呼んで欲しいです。
- ・ 有名な作家の方をお呼びするよりも、書き方講座のようなものをしてほしいと思います。
- ・ 何人かの評論者の個々様々なご意見や書評スタイルを伺えるような講演会を切に期待する次第です。
- ・ 評論文を書かれている方ではなく、物語や推理小説などを書いている方のお話を聞いてみたいと思います。
- ・ 京都にゆかりのある作家さんだと嬉しいと思います。『鴨川ホルモー』の万城目学さんや、私が書評対象に選んだ森見登美彦さんなどをお呼びしたらとてもおもしろい講演会になるのではないかと思います。

見る書評 書評関連テレビ番組紹介

週刊ブックレビュー

<http://www.nhk.or.jp/book/>

放送 毎週土曜 NHK BS 2 8時30分～9時24分（再放送は日曜23時45分～0時39分）
司会 児玉清、藤沢周、中江有里、長田渚左、三船優子
ゲスト 特集で作家が登場。毎回3名の著名人が書評者となり、3冊ずつ本を持参し、そのうちの1冊について司会者を交えて合評を行う。

私の1冊 日本の100冊

<http://www.nhk.or.jp/book100/>

放送 毎週月曜～金曜 NHK BS 2 8時00分～8時10分、BS hi 8時45分～8時55分
毎週土曜 NHK BS hi 7時45分～8時35分（土曜日は、5回分を再放送）

アナウンサーや俳優により本文が朗読され、各界で活躍する著名人が心に残る1冊について語る。現在、ホームページで心に残る1冊（原作が日本語で書かれた本）を**募集中**（800字以内で「私の人生を変えた1冊」、「思い出に残る1冊」、「感動した1冊」を投稿するもの）。

本と出会う～思い出の1冊～

http://www.bs-i.co.jp/app/program_details/index/ENR0300100

放送 毎週土曜 BS-I 8時00分～8時30分
キャスター 磯和睦美 さまざまな分野のゲストが「思い出の1冊」にまつわる想いを語る。

第4回京都産業大学図書館書評大賞 統計

1. 学部別応募者数

過去3回と同様に、第4回も応募者の所属学部ベスト3は経営学部・法学部・文化学部でした。文化学部は、回を重ねるごとに応募者数が大きく伸びを示しています。外国語学部の応募者数は4名でしたが、うち2名が入選されました。経済学部が在籍者数に比して例年少ない傾向にあります。ぜひ一人でも多くの投稿を期待します。それぞれの学部の専門書でも良いですし、学部の専門にこだわることなく、読んで面白かった本、人に薦めたい本など、ジャンルに関係なく応募してください。

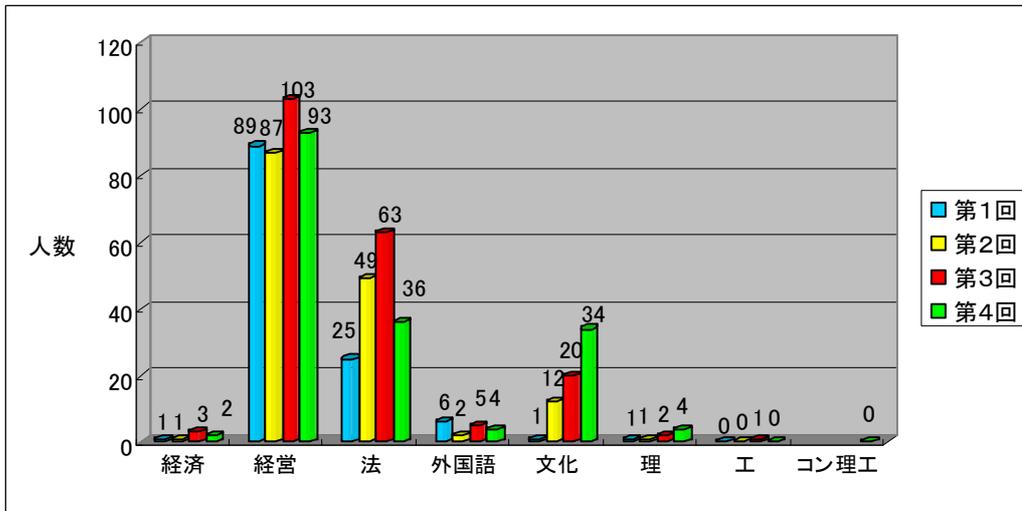
2. 学年別応募者数

昨年度は3年次生が119名と応募者数ではトップでしたが、今年度は3年次生77名と2年次生74名と応募者数は拮抗しています。4年次生は減少し、1年次生の応募がなかったのは残念でした。今回の入選者の年次は2年次生4名、3年次生5名、4年次生6名となりました。初めて応募した入選者もおられます。1年次生のときから書評応募にトライし、4年次生までの4回のチャンスをぜひ生かしてください。

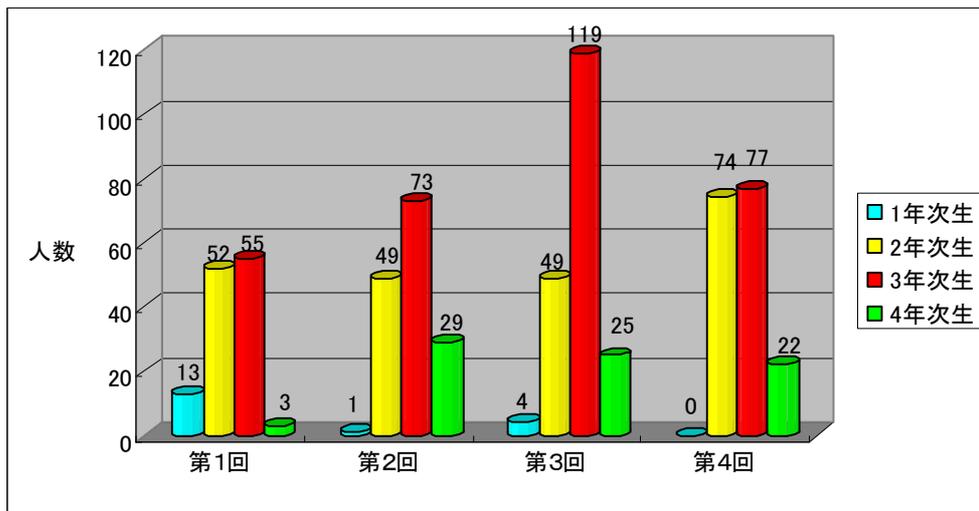
3. 対象図書の分野別冊数

「文学」分野図書への書評が最も多く、次に多いのが「社会科学」分野となりました。「自然科学」分野が激減したのは、昨年度「自然科学」分野の1タイトルの図書に29編の応募があったことが要因と考えられ、分野別の応募傾向はほぼ例年に近いと考えられます。著者別では、東野圭吾・石田衣良作品の人气が根強く、今年の特徴としては、日本の食の安全や貧困・格差を扱った作品の書評を取り上げたものが複数ありました。

1. 学部別応募者数

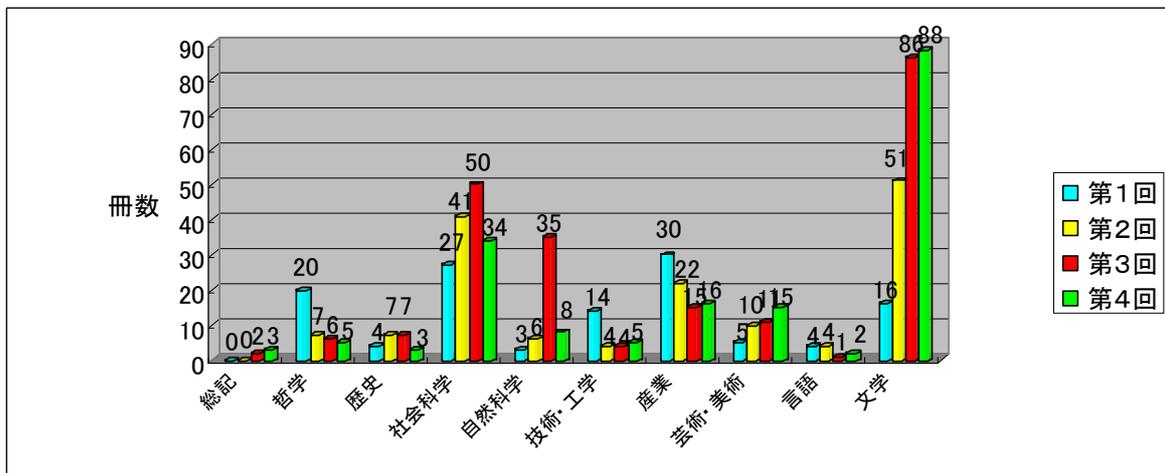


2. 学年別応募者数



※1・2の応募者数は複数篇応募の場合、1名としてカウント

3. 対象図書分野別冊数



京都産業大学図書館書評大賞 概要

》応募要領（抜粋）《

1. 目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

2. 応募資格 京都産業大学の学部学生。

3. 応募要件

- (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
- (2) 文字数：1 篇につき 1,600 字～2,000 字以内。ワープロ原稿に限る。マイクロソフト社の Word を使用すること。
- (3) 応募作品は本人のオリジナルであること。インターネット等からの盗用・剽窃は厳禁。
- (4) その他：1 人複数篇の応募可。ただし受賞は 1 人 1 篇。応募作品の使用権は京都産業大学に帰属する。

》応募総数《

173 名 179 篇

》実施日程《

応募期間 平成 20 年 6 月 1 日（日）～ 9 月 30 日（火）24 時

入選発表 平成 20 年 12 月 3 日（水）

表彰式 平成 20 年 12 月 17 日（水）

選考委員より 一言

「書評」と云うのは一体何のためにするのか？（職業としての批評家はともかく）君が本当に人に伝えたいなにかがあるとき、はじめて人に感動を与えるものであるし君の文章も生き生きとしたものになる、そのことを忘れないでほしい。
（藤井先生）

平素は専門分野以外の本は敬遠することが多いですが、今回は様々な分野の書評の力作を読む機会があって幸いでした。全体として、テレビや映画の影響の下にある文学的的作品が多く選択されていますが、古典的な作品についても、ぜひ若い感性とエネルギーで、書評に挑戦してほしいです。（柴田先生）

どんな著者が何をどのよう
に書いた本か、ほかの本と比
べてどうかなど、あなたがま
だ読んでいない本について
知りたいと思うことを書評
に書いてみてはどうでしょ
うか。（近江）

わたしは日頃、本や書評を読
むことには親しんでいます
が、書評を書いたことはあり
ません。それなのに書評の選
考委員をするなんて、実に恐
れ多かったです。沢山の書評を読
むのは、しんどかったけれ
ど、楽しく刺激的でした。
（佐藤先生）

ふだん自分で選んで読む
本とは違う分野の本の書
評を読むことで、新たな世
界を見せてもらった気が
します。今回チャレンジし
なかった人も次回は応募
してくれることを期待し
ています。（天笠）

書評とは、読み手が本を選ぶ
時に参考となる意見です。具
体的な読者像を仮定し、「〇〇
さんにこの本を読んでもら
いたい」と思って書いてみる
のもいいかもしれませんね。
次回もさらなる力作を期待し
ています。（中上）

残念ながら、単なる要約や感想
文、自己の主張のみを書き殴
ったものなど、書評とはいえない
ものが多く見られた。猛省を促
したい。次年度以降の応募者は
「書評とは何か」について、お
よび「書評には読者がいる」と
いうことを強く意識すべきで
あろう。（深尾先生）

皆さんの書評を読んで対象と
なった作品を読みたくなる、
楽しい内容の作品に出会うこ
とができました。さらには、
対象作への評価、なかには肯
定ばかりでない批評なども交
えて、書評をより深めていた
だくことに期待しています。
（池田）

この書評を読むのは、日頃
読まない分野の本に触れ、
また学生諸君の考えに触
れるよい機会を楽しみに
しています。今回もよい作
品に出会うことができました。
次回も期待します。
（真部）

※ 小田先生のメッセージは 34 ページをご覧ください。